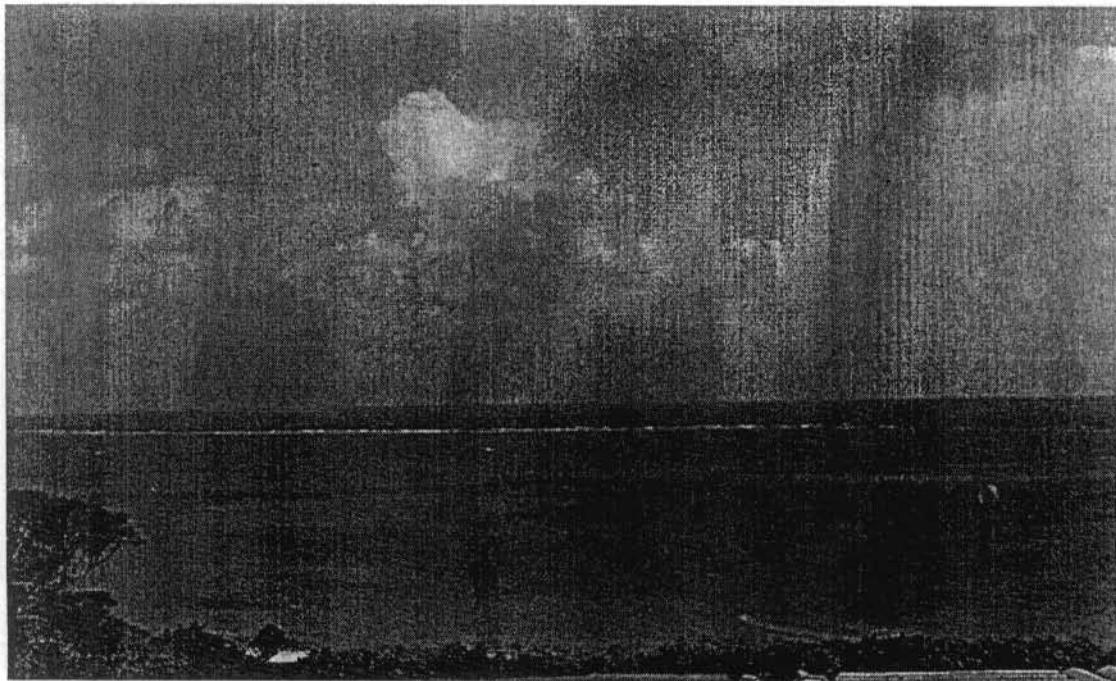


第9回おきなわ環境交流集会 報告書



日時/平成15年2月11日（火）

13:00~16:30

場所/自治会館（1階大ホール）

基調講演

演題『パートナーシップによる環境教育の推進
～地球環境問題の現状と環境教育の展開～』

谷 口 文 章 氏（甲南大学文学部 教授）

活動発表

テーマ『それぞれの立場から実践してきた環境教育』

発 表 者：儀 武 園 子 氏（琉球ジャスコ株式会社 環境社会貢献課 課長）

広 川 ヨシ子氏（豊見城市立とよみ小学校 教諭）

田 中 幸 雄 氏（N P O 法人 沖縄海と諸保全会 理事長）

宮 良 弘 子 氏（環境保全活動推進員）

目 次

1	「第9回おきなわ環境交流集会」パンフレット	1
2	「第9回おきなわ環境交流集会」の内容	5
3	「第9回おきなわ環境交流集会」の資料	77
4	「おきなわ環境交流集会」のテーマ等 (H6～H13)	82

環境問題について、みんなで話しあってみませんか。

第9回

おきなわ 環境交流集会

入場無料

テーマ「環境教育における
パートナーシップ」

日時／平成15年 2月11日(火)
午後1時～午後4時30分
場所／自治会館(1階大ホール)

開 催 の 趣 旨

沖縄県は、平成6年3月に「沖縄環境管理計画」を策定し、環境の保全と創造のための施策として、「公害及び廃棄物対策」「自然環境の保全」「より良い環境の創出」「文化的環境の保全」「地球環境保全への取り組み」を掲げていますが、同計画を推進するためには、行政はもとより県民、事業者がそれぞれの役割を分担し、相協力して取り組んでいくことが大切です。

このことから、行政と事業者、県民の連携を図るために、平成6年度から毎年「おきなわ環境交流集会」を開催しており、本年度は、自発的な環境に配慮した行動及び連携を考える観点から、「環境教育におけるパートナーシップ」を開催のテーマとしました。

さて、今日の環境問題は、廃棄物の増大、自動車排出ガスによる大気汚染、生活排水による水質の汚濁など、私たちの日常生活や事業活動に密着した環境問題に加えて、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、希少動物の絶滅など地球規模の環境問題まで極めて幅広い問題となっております。

このような深刻化、複雑・多様化する環境問題を改善するには、一人ひとりが自らのライフスタイルを見直すことはもちろんのこと、県民、事業者、行政、市民団体等が連携して、環境にやさしい社会づくりにむけて行動することが必要です。

そのため、各主体が交流することにより、環境についての理解を深め、そして、互いの実践活動を知り、学んでいくことはとても重要なことであり、必要不可欠なものであります。

その中でも、子どもたちの学習拠点である学校や地域は、子どもたちの人間形成に重要な役割を担い、社会生活や日常生活を営んでいくための基礎・基本を学ぶ場でもあることから、学校や地域で環境問題について学ぶことは、環境に配慮したライフスタイルを身に付けるとともに、地域社会の構成員としての自覚を持たせる上でも大きな効果があります。

このようなことから、「環境教育におけるパートナーシップ」をテーマに、事業者、教育関係者、市民団体、環境保全活動推進員がそれぞれの立場で実践してきた活動を発表し、相互の理解を深め、今後の環境教育のあり方と、連携した取り組みを進めていく方法を模索していきたいと考えております。

第9回おきなわ環境交流集会 プログラム

開 会

13:00

開会あいさつ 文化環境部長 永山 政邦

基 調 講 演

13:10~14:40

講 演

演題「パートナーシップによる環境教育の推進
－地球環境問題の現状と環境教育の展開－」

講師 谷口 文章（甲南大学文学部教授）

質疑応答 14:30~14:40

休憩 14:30~14:40

活 動 発 表

14:40~15:40

テー マ 「それぞれの立場から実践してきた環境教育」

事業者：儀武園子（琉球ジャスコ株式会社 環境社会貢献課課長）
教育関係者：広川ヨシ子（豊見城市立とよみ小学校 教諭）
環境NPO：田中幸雄（NPO法人 沖縄海と渚保全会 理事長）
環境保全活動推進員：宮良弘子

谷口先生を囲んでのフリートーキング

15:40~16:30

講師、活動発表者及び当日の来場者（希望者のみ）

閉 会

16:30

基調講演講師 プロフィール

谷口 文章 氏（甲南大学文学部教授）

1946年生まれ。大阪大学大学院文学研究課西洋哲学史・倫理学専攻博士課程で学ぶ。現在は甲南大学で哲学と環境学の教授を兼任し、「哲学思想基礎論」「環境学基礎編」「環境教育学」等を講じている。「人間」を形式的に哲学から捉え、その人間の「心」を実質的に心理学から分析して、人間の総体を明らかにした上で、人間が置かれている「環境」も研究対象としている。カナダのヴィクトリア大学や中国の北京大学で客座教授として講義し、「地球環境と世界市民」国際協会の会長や日本環境教育学会の事務局長を務めるなど、国内のみならず世界でも幅広く活躍している。著書は、「地球規模の環境教育」(ぎょうせい)、「環境とライフスタイル」(有斐閣)、「現代哲学の潮流」(ミネルバ書房)ほか多数。

活動発表者 プロフィール

儀武 園子 氏（琉球ジャスコ株式会社 環境社会貢献課課長）

1955年沖縄県生まれ。東洋大学文学部教育学科卒業。1993年沖縄ジャスコ㈱入社（現在琉球ジャスコ㈱）。入社以来、イオンの理念にもある「良き企業市民をめざし、社会貢献活動を積極的に推進いたします」を推進。2001年11月22日ISO14001を認証取得。店舗においては、環境教育プログラム「イオンお店探検隊」を小学生を中心に受け入れ教育を実施。2002年2月には、環境をテーマにしたエコロジーミュージカル「瓶ヶ森の河童（かめがもりのしばてん）」を那覇市・沖縄市で公演した。

田中 幸雄 氏（NPO法人 沖縄海と渚保全会 理事長）

昭和23年生まれ。昭和53年に初めて宮古島、石垣島、西表島を訪れ、以来、何処よりも美しく豊かな、沖縄の海を実感。平成7年より海浜の漂着及び、投棄ゴミの減少を目的に清掃ボランティア活動に参加。平成12年7月には「海浜の美化を目的とする清掃、広報、教育」を活動内容とする「特定非営利活動法人 NPO 沖縄海と渚保全会」を設立。同年には、環境庁自然保護局委嘱無償ボランティア。

広川 ヨシ子 氏（豊見城市立とよみ小学校 教諭）

現在、豊見城市立とよみ小学校教諭を務めながら、漫湖連絡協議会運営委員やWWF環境教育検討委員として活躍中。平成10年には南風原町立小中校内に「こどもエコクラブ」を設立。平成14年沖縄県教育功労賞を受賞。

宮良 弘子 氏（環境保全活動推進員）

平成8年より、那覇市リサイクルプラザの啓発活動に関わる。地域や学校の環境教育にも携わっている。現在、グリーンコンシューマーを増やすことを目的とした『アースの会』スタッフ。平成14年度より沖縄県環境保全活動推進員。

「第9回おきなわ環境交流集会」の内容

1 部長あいさつ	6
2 基調講演	8
3 活動発表	38
4 谷口先生を囲んでのフリートーキング	63

あいさつ

○ 沖縄県文化環境部長 永山政邦（代理）

本日はよろしくお願ひします。

先週までは非常に寒いこともありましたが、土曜あたりから非常に快晴で、今日もポカポカ陽気でございます。講師の甲南大学の谷口先生も、今日は自分の教え子である学生さん10名も修学旅行を兼ねてここに出席しているとのことであります。ありがとうございます。皆さんも今日は祝祭日でありながら、ここにご参集いただきましてありがとうございます。

それでは、私、部長のあいさつを預かってまいりましたので、読み上げてあいさつに替えたいと思います。

第9回おきなわ環境交流集会を開催するにあたり、ごあいさつを申し上げます。

ご参集の皆様におかれましては、本集会へのご賛同とご参加をいただき、心から厚く御礼申し上げます。

さて、今日の環境問題は、廃棄物の増大、自動車排気ガスによる排気汚染、生活排水による水質汚濁など、私たちの日常生活や事業活動に密着した環境問題に加え、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、希少動物の絶滅など、地球規模の環境問題まで極めて幅広く山積しております。

このような深刻化また複雑多様化する環境問題を改善するために一人ひとりが自らのライフスタイルを見直すことは、もちろん県民、事業者、行政、市民団体等が連携して環境に優しい社会づくりに向けて行動することが必要でございます。そのため、各主体が交流することにより環境についての理解を深め、そして互いの実践活動を知り、学んでいくことは非常に重要なことであり、必要不可欠なものであります。その中でも子どもたちの学習拠点である学校や地域は、子どもたちの人間形成に重要な役割を担い、社会生活や日常生活を学んでいくための基礎、基本を学ぶ場であることから、学校や地域で環境問題について守ることは環境に配慮したライフスタイルを身に付けるとともに、地域社会の構成員としての自覚を持たせる上でも大きな効果があります。このようなことから、環境教育におけるパートナーシップをテーマに、事業者、教育関係者、市民団体、環境保全活動推進員がそれぞれの立場で実践してきた活動を発表し、相互の理解を深め、今後の環境教育の在り方と連携した取り組みを進めていく方法を模索していきたいと考えております。

本日は甲南大学文学部教授谷口文章先生に「パートナーシップによる環境教育の推進～地球環境問題の現状と環境教育の展開～」と題してご講演をいただいた後に、講師を囲んでのフリートーキングも予定しております。忌憚のない活発な意見交換や、貴重なご提言がいただけるものと期待しております。

結びになりましたが、講師の谷口先生を始め、それぞれの立場から実践した環境教育《活

動》を発表していただきます琉球ジャスコ株式会社の儀武園子様、とよみ小学校の広川ヨシ子様、N P O 法人沖縄海と渚保全会の田中幸雄様、環境保全活動推進員の宮良弘子様には、講師どもご多忙に閑わらずお引き受けくださいましたことに対し心から感謝申し上げます。

本日の沖縄環境交流集会が今後の環境教育の取り組みの推進につながるとともに、ご参加いただきました皆さんにとって有意義なものとなりますよう祈念申し上げ、ごあいさつといたします。ありがとうございました。

基 調 講 演



○ 谷口文章（甲南大学文学部教授）

皆さん、こんにちは。実は関西の方からまいりましたので気候が非常に違っております。そしてまた、今日は皆さん方におかれましては、休みにも関わらず本当にご多数ご参集いただきまして誠にありがとうございます。また、沖縄県の文化環境部の方のお招きで、今日、ここでお話しする機会を得ましたことを、本当に心より嬉しく思っております。永山部長さんははじめ、関係の方々に心よりお礼申し上げたいと思います。

実は、12月に環日本海環境協力会議、環境省主催でございますけれども、派遣されまして行ってまいりました。12月のときにも30度を超えていたんです。昨日、ちょうど4、5日ほど前、京都の方は氷が張っておりました。手が長い袖で、少し厚着で来たんですが、厚くてコートもそのままで、セーターも

ホテルに置いたままという状態でございます。けれども、やはりこのような穏やかな気候であってこそ本当に自然が豊富である。だからこそ私たちは、これを保全しなければならないだらうなというふうに痛切に感じる次第でございます。

タイもよく行きます。タイの大学のプラナコン大学の方では、いつも12月に行くんですが、やはり30度を超えております。それに比べますと、12月のこの間の環日本海は開南島だったんですけども、やはり30度を超えておりました。ただ、はっきりと四季というものがあるのはやはり日本独自の位置だと思います。タイの先生なんかが、「タイには季節があるんですか」というふうに言うと、「熱い、ホット」というんです。次の季節は何ですか行ったら、「ベリー ホット（大変熱い）」、

次の季節は何ですかというと、「ベリー
ベリー ホット（大変、大変熱い）」、
最後の季節は何ですかというと、「ダ
アム ホット（呪うくらいに本当に熱
い）」というので、結局夏ばっかりな
んです。

そうしますと、やはり四季の変わり
目があつてこそ、われわれは次の心構
え、次の段階、準備にいけるだらうと
思います。特に大事なことは、やはり
人生におきましても、そうだと思いま
すが、環境の中において、次の段階の
準備段階で一旦休眠して、そして大き
く伸びていくというリズムが大切では
ないかと思います。その中でも、本当
に穏やかな夏が、先ほどお伺いしま
たら、4月から10月くらいまで夏とい
うことは、本当に四季の、京都なんか
におりますと非常に厳しいものですか
ら、理想的ではないかなというふうに
思っております。

それでは、今日のところでは、「パ
ートナーシップによる環境教育の推進」
と言うことで、環境省の方が今推進し
ておりますそのような大きな枠組みを
皆さんにお話しさせていただきまして、
中国やカナダやタイなどよくまいりま
すので、そのへんの状況も含めまして
いろいろ環境教育に関わってお話を
させていただきたいと思います。また、
後ほどの活動発表会がございますけれ
ども、意見交流などをさせていただく
ことを非常に楽しみにしております。

レジュメがございますけれども、だ
いたいそれに追っていきますけれども、

時々脱線いたします。脱線しながらと
いうことで、少し退屈になった場合に
は、話を別の方に向けていきたいとい
うふうに思います。

哲学ですけれども、ちょうど18、19
歳、あるいは少し前のときに「人生と
は何か」という、そういうふうなこと
から始まりまして、よく若い学生諸君
に申し上げるわけです。今日は子ども
たちの発表に関しまして、向こうの壁
の方とか、後ほどの活動発表の中であ
るかと思いますので、大学生の環境教
育というのは、あまり聞かれることは
少ないかと思いますが、そのあたりの
ことも触れていただきたい。そのように思
っております。そういうときに、人間
とは何かということに関して哲学的に
少し悩んだ時期がございました。その後、
大学院に行きました、公職に就いて、
学生諸君とお話をしておりますと、
心の悩みということでいろいろと相談
をもつてきました。そういうところから
いくと、実質、心の問題が大事では
ないか、だからいわゆる哲学の人間学
という形式で人間を捉えることと、同
時に、人間が心を持っているわけです
から、心の問題というふうなものに触
れていく必要があるだらうということで、
実は心理学も勉強いたしました。
それは25年ほど前の話です。

ところが、実際考えてみると、昭
和55年5月5日の子どもの日に、奇形
サルの報道がありました。どうも残留
農薬の影響らしいということがあって、
そこから直接環境問題に触れるこ

なっていました。

そこで考えていきますと、人間が形成されるのは、人間とは何かという認識と、それから心というものはどのようなありようかということで、全体像を知るとともに、実は人間が育っていく環境、家庭環境というのは多いに関わり合いがあるということもわかった。同時に申しましたように、奇形サル問題が私自身の中に入ってまいりました。

そこで人間の全体像と、それをめぐる環境、そしてその環境には崩れが生じてきているというようなことで、後ほどビデオテープを観ていただきますが、淡路島のモンキーセンター、たくさん奇形サルが発生します。毎年。それを訴え続けておりますけれども、少しそういう環境問題にも触れていたいというふうに思っております。

もう一つ、環境教育は、今の子どもたちとともに若い世代、大学生も含めて若い世代がやはり担っていっていたかなかったら、いけないわけなんですけれども、少し心配なところがあります。というのは、ここへ来られているような若い方々はちゃんとした問題意識で活動もされている方だろうと思いますけれども、割合に自閉的な若者が増えてきている。潔癖性といったらいいんでしょうか、半径2.5mぐるっと回った自分の世界に他人が入ってくるとむかつくなという形になるわけです。

そこで環境問題ということをやると、自他が分離していたら環境というものはうまく片づいていかないわけなんです。

そういうところからいくと、今の若者たちが非常に自閉的で、どういうことかというと、非常勤の先生が来られて、ご紹介して、外へ出たら、ミニスカートの女の子が座り込んでいる、廊下の下に座り込んでいるわけです。一人はソフトクリーム、ひとりはお弁当、一人はたばこを吸っていたわけです。普通だったら「立ちなさい」と言うんだけど、思わずその世界が完璧であったために、3人の世界が完璧であったために「おいしいか」と言ってしまったんです。そういうような状態の一つの世界ができあがってしまっているわけです。それは同時に、今度は潔癖性ですから、自分の世界の中に入り込んでくるとむかつくな、切れるということが起こってきます。

鹿児島、屋久島の方の写真も後ほどお見せいたしますが、屋久島も行ってまいりましたけれども、そのときに西鹿児島に夜行列車で、あるお母さんと一緒にになりました。そのときに「どちらの方ですか、お里ですか」というふうに聞いたら、「そうなんですよ」ということでした。そのときにお孫さん、子どもさんも「大変ですね、おばあちゃんのこと心配していますね」と言ったら急に泣き出されたんです。「どうしたんですか」というふうに言ったら、「いや、一番かわいがってくれた孫が、初孫が危篤にも関わらず『おばあちゃん汚い』と言った」というんです。そういうところは結局若い人たちがいつまでも強くて美しい状態、これは男女

問わずです。そういうふうな形での発想というのが少し問題があるのではないかなどというふうに思います。もちろんごく一部の若者ですよ。だけれども、傾向としてその傾向が強くなってきている。自他が分離してしまう。自分と他人、自分と環境というふうなものが分離してしまう。そういうふうな状況があります。

これをやはり、今日はたまたま学生たちが卒業旅行を兼ねてくれてますけれども、いろいろと調査旅行へ連れていきますと、いろいろと目覚めることがあるように思います。そういう意味で、やはり自然の中に触れるということが、私たちが環境問題が起こった場合にどこが問題であるかということを直感する力を培うことになるだろう、そういうふうに思いますので、ぜひ、皆様方も今の若者たちが何かやろうと、いいときはいいんだけど、後はボツと違ってしまうということではなくて、継続できる感性、そういうふうなものも必要ではないかということも最初に申し上げておきたいなというふうに思います。

「はじめに」のところがございますが、少しレジュメを見ていただきまして、21世紀は環境の世紀だというふうにいわれる場合があります。果たしてそうでしょうか、実は環境というものは何を生み出しているかというと、命なんです。多様な命を生み出しているわけです。ですから21世紀が環境だといったところで、環境の主体、主

人公はやはり命なんです。これは人間のみならず、全ての命、多様な命。ここを同時に認識して、同時に知った上で21世紀のあり方を考えていく必要があるだろう。21世紀の人間と環境というものを考えていく必要があるのじゃないかと思います。ですから、何のための環境かというと、生命、あらゆる多様な生命が健全に生きていける環境、それをどう考えるかということだと思います。環境だけ、箱だけを考えてもいけないだろうというふうに思います。また、そういう意味で、環境は命を生み出すわけですから、環境と生命は表裏一体であるということも最初に認識しておきたい、そういうふうに思います。

それともう一つだけ、後ほどグローバルな形で地球規模的なところでちょっとだけ調査などもして、皆様方もそうだと思います。行ってきました。そのところで区切りの問題ということがあります。そのところでは、国家における闘いみたいな形になるんですけども、むしろ環境問題は国家の枠組みを越えてしまう。先ほど若者たちが、自他がはっきりと区別されるのではなくて、お互いが相手の立場に立てるというような考え方じゃないといけないと思うんです。区切りをあまり厳密にしない方がいいのではないかということも少しお話をていきたいと思います。

いきなり、冒頭からの雑談、余談になります。外と内の区切りは、それは

ど明確かというふうなことで、ちょっとだけ申し上げておきたいんです。普通は、この部屋と向こう側の外側の部屋というのがあります。どなたでもけっこうです。ちょっと私、こういうふうに一方的にやるよりは皆様方と一緒にお話をしながら、すみません、お名前は。

○ 島袋

島袋と申します。

○ 谷口

島袋さん、この部屋と外側の区切りというのはどこにありますでしょうか。

○ 島袋

やっぱり玄関だと思います。ドア。

○ 谷口

ここの場合だったら壁ですね。普通はそれでわれわれは納得ですね。

それでは島袋さん、外へ出て行っていただいた場合、そっち側が内になりますね、こっち側は外になりますね。その区切りは。

○ 島袋

パッと言われてもね…、やっぱり壁でしょうね。

○ 谷口

同じ壁だと思うんですよ。

ところがよく見てくださいね。あの壁の厚さは少なくとも15cm～20cmあるんですね。島袋さん、この壁の厚さは、こちらにおられる場合、外に属しますか、内に属しますか。

○ 島袋

内に属すると思います。

○ 谷口

内に属する。それでは島袋さん、廊下に出ます。そのときに廊下が内としますね、壁はやはり内に属しますよね、そうすると。

○ 島袋

外壁だと思いますけれども。

○ 谷口

内壁、外壁。今の論理だと、こちらの方の外側だけ、廊下に出ますと、今度は向こう側だけですから、壁の厚さは内にも外にも属さないという奇妙なことになるんです。わかりますか。今度は逆に、外側までを区切るというふうにしますと、内に属し、外にも属することになりますね、壁の厚さが。

日常生活、われわれの知識というのは、日本の地図があります。線で引いてきちんと分かれているかのようだけれども、実は今言いましたように壁の厚さのような現実の世界は無視されているのではないかと思うんです。

もう少し変なことを言います。ちょっと私、哲学をやっているので変なことを申し上げますと、お名前は。

○ 関

関と申します。

○ 谷口

関さん、日本の地図、沖縄でもかまいません。沖縄のところで一つだけ取りましょうね。一番大きく沖縄を探る場合はどうしたらいいでしょうか。どういうときに測ったらいいでしょうか。

○ 関

ちょっとよくわからない。

○ 谷口

普通は地図で見ますと、線で引かれていますね。干潮のときは土地が増えていますね。満潮のときは土地が減っていますね。そうですね。これが現実の世界なんです。われわれは学問であるとか地図とかいう知識の場合は線で切ってしまうんですけれども、実は満干潮においては巾があるということなんです。その満干潮の巾にこそ実は命が育っているということなんです。この現実を見なかつたら、われわれは環境問題というふうなことを言ったところでどうしても頭でっかちになって、満干潮が一番遠浅があってとかいうふうなことを実地に見ていかなかつたら本当はわからないだろう。少なくとも海から押し寄せ押し寄せしながら、そして干満があって、湿地帯になって、全ての命がそこに集まってきて、それから陸上に上がっていくということになります。そのへんのところの線というのは、実はあまり厳しく引くことができないのではないかというふうに思っています。

ですからそういうところまで、少し哲学で物事の考え方ということですので、思考方法を少し柔軟にしていただいて、むしろ現実を見ていきたいというふうに思います。

少しだけ、最初に脱線いたしましたけれども、要するに一番大事なポイントは、区切って自他分離してしまうと相手の立場に立ち得ないということになります。それは貴重種がいて、貴重

種がなぜそれをやらないといけない、自分が、ある種のチョウチョが滅びようが関係ないというふうに言えばそこまでなんです。だけどもそれも自分の立場として置いた場合、これはやはり全生態系を考えることになるだろうというふうに思うんです。ですから区切りというふうなものは、柔軟に動かし得てこそ、われわれは強制できるんだということになっていくかと思います。そのへんのお話も今日は繰り返し申し上げていきたいと思いますが、それでは今のレーチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』を中心としながら見ていきたいんですが、いうまでもなくレーチェル・カーソンはサイレントスプリング『沈黙の春』 DDTを撒くことによって、害虫を殺したつもりが害虫も益虫も殺してしまった。そしてその虫を食べていた小鳥たちが亡くなつた。小鳥たちを食べていた小さな動物が死んだ。そして大きな動物もまた死んでしまつて、人間も死んで、沈黙の春が訪れたということ、そういうふうなお話があったかと思います。けれどもレーチェル・カーソンは実は海洋学者でもあったわけです。その海辺、浜辺というものをずっと研究してまいりました。そういうふうなところのワンシーンを少し見ていただきたいなというふうに思いますので、お願ひいたします。

次のシーンの方をお願いいたします。環境は命を生み出す、環境と生命は表裏一体している。それではレーチェ

ル・カーソンが、なぜ『沈黙の春』のような鋭いエッセーを書くことができたのか。実は彼女は感性豊かであったということになります。私たちは子どもはやはり非常に感性豊かなんですが、勉強すればするほど何を得るかというと、知恵ではなくて知識を得てしまう。それが今の区切りの論理の問題になってしまいます。そうではなくて、感性豊かということは、イメージ豊かでもあります。そういう場合は軽々と実はその区切りを越えることができるんだということ。したがってそこで行き詰ったときには、新しい発想ができるということになります。そういう意味でレーチエル・カーソンの少し感性の世界、『センス・オブ・ワンダー（驚きの世界）』ですね、そういう感覚というふうなものが、どのようなものかを少しご覧になってください。

次、お願いします。

先ほど言いましたように、海とそれから陸地というものが区切りがあるかのようだけれども、常に繰り返し押し寄せる波、それが浜辺であるし、命の一番の故郷であるわけです。ですから海から上がっていき、そして徐々に徐々にと上へ上がっていき。この繰り返しということが大事です。40億年、45億年の地球の歴史を踏まえながらも、繰り返しながら命というふうなものが実は形成されてきたわけです。これはボーダーラインなんですけれども、どこからどこまでかは一つの線で引くわけにはいかない。

次、お願いします。

波の輝き、このような非常に素晴らしい感性の世界というのは誰にでもやはり訴えていくだろうと思うんですが、やはり忙しい、忙しいというふうなことになりますと、われわれは見えていても心の目で見なかつたら見えないとということになるかと思います。

次、お願いします。

これは日本海の方で、これは私が撮った写真ですが、琴弾浜という所で、水が取り残されている。そこで生物が残されている。そして徐々に今度は陸に上がっていくという非常に長い時間をを考えた場合、貝なんかがそうでしょう。ヒトデもそうであったかもわかりませんが、そのような状況で海辺に命が誕生していく。

次、お願いします。

歴史がこの間だけであっても、この海岸の岸壁ですけれども、何千年、何万年、何億年という歴史が刻まれているということがおわかりだと思います。

つぎお願いします。

次第に陸へと上がっていく。

次、お願いします。

まず、シダ類が繁茂します。そこからいろいろな植物というのができあがっていき、実は地球というのは一つの生態系であること、これを忘れてはならないだろうと思います。エコ・システム。システムです。いわゆる一つだけが関わるのではなくて、全部が連鎖反応していく、したがって共生していく、そういうふうなものがあつてこそ、

われわれ命というのはお互い育っていくことができるであろうと思います。次、お願ひします。

夏、秋、だんだんと陸の上にいろいろな植物が栄えてきます。

次、お願ひします。

そして先ほど言いましたようなリズムというふうなことが必要ですから、厳しい季節というふうなものを越えて、そしてまた再び目を吹き出すということになります。一つの四季ということ、要するに1年間の循環を外してしまって具合が悪いわけです。どういうことか。例えば温室野菜の場合は実は時間をグッと圧縮したり延ばしたりします。ですから冬場であってもイチゴが食べれる。沖縄は食べれるかもわかりませんが、少なくとも関西、東京の方では食べれないわけですね。温室栽培にすると食べれるわけです。だけれども、春、夏、秋、冬というリズムを狂わせて、そして温室栽培した食べ物、果物、野菜の場合、これはあまり栄養価は、ビタミンがないんです。ですからやはり1年間の辛抱ということが必要になってくるだろうと思います。これは必要最小限度の単位、特に環境教育においてはいい季節だけではなくて、四季を通じた下準備などが必要になってくるかと思います。

それからもう一つ、「巡る」というふうに書いてあります。「水は巡る」、循環には実は3つあるだろうと思います。それは水循環が一つ、もう一つは大気の循環です。そして今日は環境だ

けかと思ったら、少し命の問題を申し上げましたが、命の循環というもの、世代間に渡っての命の循環ということ、この3つの循環をおさえる必要があるだろうと思います。もう一度申し上げますと、水の循環、大気の循環、命の循環があってこそ環境教育の基本的な軸ができあがっていきだらう、そのように思います。

次、お願ひします。

残念ながら、私は京都に住んでおります。大学は神戸なんですけれども、京都の方も自然が、特に山の方に入っていますと、亀岡という所ですが、非常に自然がいっぱいです。そうするとあまり自然に恵まれていることに気がつかないんですね、当然のことになってしまっていて。だけども、三重の四日市なんかでお話しさせていただいた場合に、四日市喘息がありました。水俣の場合もあります。そうすると後の政策が非常にうまくいっている場合があります。要するに私たちは痛みを感じなければ、それに気がついていかない。実際の行動に伴っていかないというふうなことがあるような感じがいたします。そして自然は美しいというふうなことを、いやいや、そうじゃない、先ほどのように氷が張って厳しいということ。そしてよく子どもたちを学校の先生方が連れていったときに事故が起こる場合がある。1回起こったら、それでストップしてしまう場合がありますけれども、そうではないんですね。それを乗り越えていく強さと

いうふうなものが教える側においても学ぶ側においても当然なければならぬ。それを覚悟しておかなければならぬ。要するに自然は優しさだけではなくて厳しさがあるということ。そういうふうな中において、環境教育はやはりなされていく必要がある。

そして、今からご紹介いたします。若本さんという方が24歳でガン告知されて亡くなりました。だけれども彼は取り付かれたように、この自然の美しさ、命の美しさを写真を撮りづけています。3万枚の写真を撮りました。やはりわれわれは追いつめられてこそ、始めて有り難さ、環境の有り難さ、有り難ってどう書くかというと、「有ることが難しい」めったにないんですね。これが当たり前になってしまふと有り難いと思わない。そしてまた洞察力、『センス・オブ・ワンダー』というものが子どもの頃は持っていた。ところがだんだん知識が増えてくると、知識に安住してしまって自分から工夫し、直接実感する、そういうことがなくなってしまう。そして大人になってからハッと気がついたのは、こういう極限状態に追いつめられてはじめて気がついていくわけです。その若本さんの写真をご覧になってください。白鳥を通じて自然の本質的な事柄を明らかにされているのではないかと思います。

お願いします。

「光と響き」、「広狭群栄」、群になって白鳥が泳いでおります。これは「朝日」です。

次、お願いします。

「光を求めて」

次、お願いします。

「幻翔（幻の羽ばたき）」、たぶん、あまり白鳥をわれわれは普段は見ることはないとおもいますが、田舎の亀岡の方におりますと、ガンとか、カリなんかが、こういう状態で飛んでいくのが時々見えます。たぶん沖縄の方だったらもっと豊富にこういう自然を見る事ができるのではないかというふうに思います。

次、お願いします。

「静寂」、2羽のたぶん雄か雌か、カップルでしょう。「静寂」。

次、お願いします。

「地吹雪」山ということですから、先ほど言いましたように自然の厳しさ、それに堪えてこそ、この白鳥の美しさというものが出てくるのではないかと思います。

「夕日に舞う」それであってもやはり生命の表現というようなものが、ここに表れているかと思います。

次、お願いします。

「虹の光」です。ここに白鳥が群れになっておりますけれども、虹がずっと架かっていて非常に幻想的な世界、環境というもの、あるいは自然の本質のようなものが、この写真の中に表現されているのではないかというふうに思います。

次、お願いします。

ということで、今のお話のところなんですかとも、もう一度繰り返して

おきたいと思います。われわれは21世紀においてどう生きていくべきか、これは21世紀の人間と環境の問題だろうというふうに思います。その人間というものが一人間ではなくて、全ての命というように広げていきたい。全ての命と環境というふうなものがどのようにあるべきなのかということが大きなテーマになるだろうというふうに思います。したがって、命と環境といふのは表裏一体している。そのことがわかるためには、やはりセンス・オブ・ワンダー感性です。驚きの感性というふうなもの、それを私たちはもう一度目覚めさせる必要がある。そういうふうに思います。

また、自然環境というふうなものも、やはりいいこと、いいこと、野外学習、そういうふうなことがあるかわかりませんが、やはり指導者の方々もよほど注意して指導する必要もあるし、子どもたちもやはりうっかり踏み込んでいった、後悔する。この頃、後悔しないようにしますから、親御さん、学校の先生が。そうではないんです。ある程度、後悔し、そして自分で工夫するということが必要ではないかと思いますので、そういうふうなところでは手放しで素晴らしいというふうには言えない。だから、その心の準備があってこそ本当の自然の優しさ、厳しさと同時に優しさというのがわかるのではないかかなというふうに思います。また、若本さんのように、あと数ヶ月の命といわれて、そして命が輝く場合がありま

す。だけれども、その前の生みの苦痛というもの、実は私たちは、この地球、生態系がひょっとして何か大きな大きな問題点にあって、だからこそやっと環境問題というものを何とかしようとしている。やっと極限状態におかれ、やっと気がつきつつあるのではないか、というふうに思います。若本さんの写真などを見ながらそういうことも少し感じましたので、皆様方にご報告をさせていただきました。

さて、今日の本題の一つです。環境省の方が実はいろいろと政策の方を直接お伺いしたりしております。そのときに、パートナーシップ、実はこれは文部科学省も同時にやっております。パートナーシップによる環境教育、環境学習の推進ということを言い出しました。環境基本計画の中に環境教育はかなり重要な方策として唱われています。そして昨年度あたりからパートナーシップによるということ。

そのパートナーシップの出発点はどこにあるかというと、生活地域環境です。今度、まもなく活性化方策というのが法律化されます。立法化されます。その中に謳われているのがやはりパートナーシップであり、地域の環境潜在力という言葉があります。地域の環境潜在している力、まとめて言いますと地域環境力といいます。地域環境力を喚起しなければならない。そのためにはお互いパートナーシップを結びましょう。そのことによって一人ではできなかったパートナーシップの効果を発

揮させましょう。そういうことを政策の方では狙っております。もちろん国の政策ですから、それは一般論です。個別に地域のNGO、NPOの方々、あるいはそれぞれの子ども、エコクラブの方々など、横のつながりを含めながらパートナーシップもある意味でうまくいくし、ある意味に難しいなというふうに経験されているのではないかというふうに思います。

環境省から発信して文部科学省、要するに縦割り行政がどうしても行政関係は強いですけれども、何とか横に結んで、省同士のパートナーシップを結びつけようとしております。現在、環境省の方の、このパートナーシップによる環境教育、環境学習の推進調査を依頼されておりまして、そのへんの中間報告も兼ねましてお話をさせていただきたいと思います。

それから、もう一つ、これは私、大学が神戸にありますから、神戸市の方の下水処理場の方とのパートナーシップのほんの少しだけの例をご紹介したいと思います。それから国際的なパートナーシップということで、ローカルなところからやはり活動し、グローバルに考えていくというわけですが、もう考えていてはダメです。今はインターネットを使ってすぐに連絡取れるはずですから、そういうふうな形で時々数年に1回は会ってみるというふうなことも必要かと考えております。

順次、見ていきたいと思います。お願いします。

こういう図を書いてみました。決してパートナーシップということが国の政策によるトップダウンであっては、なかなかうまくいかないだろうと思います。したがって、私たちの地域の環境活動NGO、NPOの活動というふうなもののが順次上に上がっていくかなければならないだろう。ボトムアップ。ボトムアップしてこそ環境というふうなものがうまくいくのではないかというふうに考えます。しかもそれは生活エリア、市のレベルのエリア、都道府県のエリア、国のエリアというふうに上がっていき、むしろいろいろな環境関係のセクションは市町村、都道府県、そして国の方は、かなり開かれているというふうに考えていいと思います。そういうところから言いますと、今日のNGO、NPOのお話など、後ほどございますでしょうかけれども、そこのところ窓口が開かれているわけですから、その実績を積み上げながら、パートナーシップをより大きくしていくいただきたいというふうに思います。

その場合、いわゆる生活エリア、市エリア、都道府県エリア、国エリアを横滑りさせまして、そして一挙に、例えば、生活エリアが国から助成金をもらうということは、まずあり得ないだろうと思うんです。普段は。ですから、そういう意味ではやはり同レベルの同規模の、それはどういう意味かというと、人数、それから予算を含めてだいたい同じところでネットワークを作っ

ていくということは必要ではないかと思います。

そういうところから、今度少しだけこれは上位関係ではありませんが、要するにパートナーシップを広げていくというところにおいての上位、要するに秩序としての上位というふうなものを持っていけば意外と連携できるのではないか。したがって、それはどういう意味かというと、ボトムアップしながら、やはり今度は助成金などをもらったり、いろいろとアドバイスをもらってトップダウン、トップダウンしながら、またボトムアップという循環ですね。こういうふうなことが今可能になりつつあるということを知っておいていただきたいと思います。特に、環境省の方は地球環境基金というふうなものを設けましたので、かなりN G O、N P Oの方々もそのへんのところ申請すれば当たる可能性があるような感じがいたします。

次、お願ひします。

例えば、地域の方の環境の場合に、こここの町内ではA町内とBの子供会があつて、環境教育を通じて一つのパートナーを組み上げる。こちらの方は、これは町内の清掃です。こちらの方は同じ川がありますので、CというP T AとDという学校があつて、河川を環境教育を通じて清掃する。そうするとレベル的には同じですから町内の方と、こちらの町内の方とこちらの町内の方が結びあつて、環境教育を通じて生活地域環境の改善創造を行うということ

は十分可能かと思います。

次、お願ひします。

それが先ほどの円筒形なんすけれども、今度は生活地域のクリーン活動、ゴミ分別運動、こちらの方は生活地域のクリーン活動やリサイクル運動というのが別々の生活住民レベルにあった場合、環境教育を通じて、これは別個のものではありませんから、ゴミ分別とリサイクルは、合わせて今度は市町村レベルのパートナーシップが組めるだろう。

次、お願ひします。

今度、Aという市とBという市が同じ市町村レベルのものがあって、片一方は市民クリーン活動で循環型社会を目指す、片一方では市民クリーン活動で持続可能な社会を目指すといたします。そうするとAという市とBという市が環境教育を通じて都道府県レベルの活動へとアップしていくことができるだろうというふうに思います。そうしますと、今のボトムアップの仕方が、より具体的に示されているだろうということです。

そういうようなことを実は全てのこういうネットワークと入れ子になっているということでもあります。ですから、一つだけやると全部が芋蔓式で本来出てくるべきだし、本来その芋蔓は機能を発揮しなければならないだろうと思います。

次、お願ひします。

Aという県と、例えば、沖縄県と鹿児島県があった場合、それで海洋をき

れいにしようとかいうふうなこと、あるいは水の条例化、大気汚染の条例化、合わさって全体の国の、日本の環境の改善と創造、そういうこともあり得るであろうというふうに思います。

このようにして1対1で1個ずつではなくて、2つがパートナーシップを組むことによって10の効果を上げていきたいというのが、どうも環境省のいわんとするところであり、実際に私たちも調査いたしましたけれども、そのような方法でうまくいっているグループもあります。今日は、それは一つのアドバイスというふうな程度に聞いておいていただければと思います。

次、お願いします。

これは、甲南大学が神戸市の方にあります。こういうビオトープを作つてほしいという委託がございまして、委託研究になっております。これは図面を学生たちと一緒に作りまして、ここのことろは更地で、平面地なんです。ここに学生がいるのは、その下準備で何か作りたいなということで、今、見学にいっているところで、ここのことろは平面地なんですが、最近便利ですね。コンピューターでもって、こんなイメージ図をやっているんですが、これはまだできておりません。今から3年ほどかけまして作ろうと思っております。それも今度大学というところが、あるいは小学校、中学校、高校でももちろんかまわないと思うんですが、地域のこういう行政も含めて、関係を持つことでパートナーシップ、学社連携、

学校と社会の連携、そういうふうなことも行われつつあるということも少しだけお知らせしておきたいと思います。

あともう一つ、やっかいなパートナーシップの実態です。おそらく連絡協議会、あるいは運営協議会のような組織を作らなかつたらダメだと思います。これもなかなか難しいことではありますけれども、各地域で試行錯誤しています。例えば今、私が考えておりますのは、甲南大学の学生と、それから地域の住民、自治会の住民の方々と、それから地域の魚崎小学校、中学校というのがあります。そういうふうな人たちと一緒に運営協議会を作ろう、3月に作ります。その方向でパートナーシップを組んで、常時学生だけ、小学校の子どもだけが行くのは非常な重荷になってしまいます。維持管理というのがありますから。そういうふうな息を長くしなければ環境改善、あるいは保全、あるいは創造することはできないなというふうに思っております。これは一つの、今まさに起ころうとしている試みのご紹介です。地域との連携ということです。

次、お願いします。

それから、やはり国際的にいろいろなところでの連絡ということが必要だと思っております、そういう意味ではインターネットで海外とも結びつけておりますが、やはり1、2年に1回は皆さんとお会いするというふうなことで、96年から国際会議をやっております。この時はカナダとかタイとか中国

とかドイツからお呼びいたしました。
4カ国、5カ国からお呼びいたしました。

次、お願いします。

もう一つ大事なのは、やはり若者の世代ということ。学生会議というのは、必ずそれに応じて、付随して学生の諸君も一緒に参加してもらっています。これは中国の北京大学の大学院生なんですけれども、甲南大学の学生と一緒にいろいろと学生会議をやりました。これは各地域で、こちらが行った場合も一緒に学生会議をやっております。

次、お願いします。

それから、やはり教育関係で、しかも国連、国際的な協力の問題というのは国連の中のユネスコです。ユネスコも3度ほど学生を連れて行って、いろいろと説明して、ユネスコの活動などもいろいろ勉強しております。

次、お願いします。

それから、日中の環境教育の情報交流のシンポジウムが99年に北京大学の方で開催いたしました。

次、お願いします。

それから、タイの方でも、こういうふうな国際会議をやっております。これは大学だからできるということではなくて、西宮市の方で去年やりました。一昨年になりますけれども、子ども環境会議というのがあります。これはやはり行政の方のテコ入れが少し必要ですけれども、場所の提供

と予算の面なんですけれども、やはりそれぞれの小学校の子たちが全世界から集まってというふうなこともできるかと思います。また、NGO、NPOの大きな母体があった場合、そういうふうなところが支援してすることもできるであろうと思います。既存の場合は、子どもエコクラブ、環境省が押しておりますけれども、そういうふうふうな中に載ってやることもできるかと思いますので、上からは与えてくれませんので、トップダウンでは消してありませんから、ボトムアップ的にいろいろな方策を考えられてはいかがでしょうか。

次、お願いします。

これはつい去年の11月30日、甲南大学で第2回の日中の環境教育のシンポジウムを行いました。

次、お願いします。

それから12月、先ほどちょっと言いました、海南島の方に行ってまいりました。5カ国が集まって、日本、中国、韓国、モンゴル、ロシア、それからユネップでいろいろと議論してまいりました。少しだけ私、いろいろなことを言う癖があるので、少しだけホラを吹いてしまいましたけれども、日本海をビオトープとみなして、どんなに宇宙衛星から赤潮が出ているとか、そんなことをやるよりも、日本海をビオトープとみなして、日本海沿岸の小学校の、あるいは中学校の子どもたちに協力してもらうんです。そして向こう側から流れてくるゴミを全部集めていって、

それを一つの表にしていくんです。逆に日本から向こうへ何を流しているかというふうなことをやれば、船を1隻ずっと横断させて、定点観測しますとだいたい1千万円以上かかります。そういうふうなお金を使うよりも、むしろこの5カ国が結び合うパートナーシップを組んで、そして、より精密な調査ができるのではないかというふうに思っております。ですから、決して小学校の子たちがやることが初歩的であるという意味ではなくて。より具体的であるというふうに考えてもいいと思うんです。高度な分析は何とか研究所とかセンターの方にお任せしたらいいと思う、けれども、現実に何が流れてきたのかということは、これは子どもたちだってわかるし、また、子どもたちの多数の手がなかつたらできないこともあります。これが環境教育がやれること、大きくやれることではないかなというふうに思っておりましたが、いずれにしろこういう政府間レベルの会議だけだったら何かまどろっこしくて、実際にはやはり現実の子どもたちが参加するというふうなことでないと、解決していかないのではないかなどというふうに感じておりました。そう思つて帰ってきました。

ただ、大気汚染の問題、オゾンホールの問題と飲み水の問題ってものすごく深刻だということを知っておいてください。特にモンゴルの方、ロシアの方、それから中国の方、これは日本人が、このような私たちも水が常時出ると

いうこと、飲み水を、そのまま生水が飲めるということ、そういうことは普通はないわけでして、そういうふうなこともやはりわれわれは頭の中に明記しておかなければならないだろうと思います。

次、お願ひします。

ということで、一通りパートナーシップのこと、もう一度まとめておきます。今、国の方はパートナーシップによる政策を進めつつあります。特に環境教育によるパートナーシップは、1対1、1個1個ではなくて、それが累積的にといったらいいのか、要するに倍々の形で、足し算ではなくて広がっていくということを期待しております。累乗的に広がっていくことを期待しております。したがって、そういう意味では今が環境教育をそれぞれの地域でやっておられる場合に、今がチャンスだし、ネットワークを作る大きな時期でないか、岐路に、ある意味できているのではないかと思いますので、思い切って飛躍していただければなというふうに思います。

あと、資金面の方も、かなりあちらこちらの方から出る可能性がありますので、そういうところもいろいろと運動していただければなというふうに思います。

もう一つ、地域の環境力、地域に眠っている潜在的な環境力というふうなものも、どんどん活性化していただければというふうに思います。

それから、あと、国際的なパートナ

ーシップも、やはり、そんなにたいそうなことではない、まず、インターネットから上方を集めさせていただき、また皆様方がホームページを作っていて、横の連携というふうなものをネットワークを広げていただければというふうに思います。

次、お願いします。

もう一度、命の話に戻りましょう。行きつ戻りつしながら深めていきたいと思っております。命というふうなものがどういうふうなものであるか、まず、いまでもなく、卵子と精子がいて、受精卵ができます。

次、お願いします。

なかなか卵子、男性は大変でして、1億以上の精子で、一つの卵に向かって、女の子に向かって行くわけですが、運良く一つの一番強い精子が合体する。そして受精するわけです。ここで既に選択されています。

次、お願いします。

分割しはじめます。

次、お願いします。

そこから実は神経が始まっていくんですけども、実は私たちは考え方、先ほどいいました区切りというのは幅ある、移すことができるということをいいましたね。それともう一つ、今度は両極端になると、生と死は同じものなのだという発想まで一回極端に広げてみてください。生と死は別というふうに思われるかわからないけれども、むしろより充実した生のときに死を予感する、スポーツなんかやっていたら

そうだと思います。もうちょっと別なことをいいましょう。皆様方、手をこうしてみてください。ここに、今からお見せいたしますけれども、実はヒレが付いていたんです。母胎の中にいるとき、胎児のときにヒレがついていたんです。だからDNAで生のプログラムが組まれている間のプロセスの中ににおいてヒレが付いていたし、尻尾が付いていたんです。こういうふうに。これを経て、そして今度ヒレがなくなつて、尻尾がなくなって、そして今度は、この状態が魚のような状態で、それから海と両方の両生類の形、海と陸地、それから哺乳動物のような顔をして、そして人間の顔になって生まれてくるんです。9ヶ月の余りの間に。だから私たちはお母さんのお腹の中にいる間に、実は生命40億年の歴史を繰り返しているということなんです。それをちょっとだけ見ていただきたいんですが、もう一度いいます。

DNAは生の生きるプログラムだけではなくて、死のプログラムが組み込まれているということです。だから死のプログラムがあるからこそ、結局、このヒレがなくなって生まれてくるわけでしょう。死のプログラムがあるからこそ、尻尾をつけては生まれてこないんです。だから生を成立させるためには死というのが背後で働いているということになります。だから、生と死は別個ではないということ。私とあなたは別個ではない、人間と環境は別個ではなくて、全部つながっているとい

うことなんです。

それから、全ての命も全部つながっているということ。ご覧になってください。神経系ができはじめます。

次、お願ひします。

受精後の5週目ですが、手のところを見てくださいね、ヒレが付いておりますでしょう。

次、お願ひします。

頭が大きくなっていて、何か両生類のような、あるいはもう少ししたら豚のような顔になるんですけども、あまり人間らしい顔じゃない。それは実は全ての命を繰り返しているわけです。書いてあるかと思いますが、難しくいいます。ヘッケルはいいましたが。

「個体発生は系統発生を繰り返す」、われわれが人間として生まれてくる個体は、実は40億年の歴史の系統発生を繰り返してはじめて生まれてくるんです。そういうところからいくと、自分も他のいろいろな命も別個ではないということがおわかりだと思います。1年足らずの間に、40億年の歴史、時間の圧縮化が起こっているということです。

次、お願ひします。

こういうような状態で浮かんでいるわけですが、羊水は生理食塩水の濃度と同じですよね。ということはどういうことかというと、われわれは海からこの陸へ上がってきたということと同じですよね。

次、お願ひします。

これは妊娠8週で、足、それから手

ですけれども、8週のときにヒレのような状態。13週のときにもう人間の足、人間の手のようになってくる。そして23週のときには、はっきりと人間の手足になって生まれてくるわけです。ということは、やはりわれわれが人間としての個体にならんがためには、こういう魚のヒレのような形から、だんだんと両生類、ほ乳類、そして人間として生まれてくるということ、これを知っておいていただきたいと思います。

次、お願ひします。

もうお腹の中で指加え、指シャブリをやっているんですね。だから小さいときから口の運動とか、それから羊水を飲んでは吐いたり、それから外へ出したりします。そういう練習をやっているんです。肺呼吸になったときに「オギヤー」というふうにいうわけですが、そのときにはへその緒が離れていて、今度は肺呼吸という形でもって産声を上げるわけです。そこももう一回死んで生まれているんです。

次、お願ひします。

これは生まれる瞬間、産道から頭を出したところです。たいていはいい形でいるとお母さんはあなたを生むために生みの苦しみを味わったというけれども、それはお母さんの立場。実際子どもは、生まれの苦しみを経験している。これは同じ命をかけているんですね、両方が。一方だけというのはあり得ないわけです。だから例えば先ほどサイレント スプリング『沈黙の春』、害虫がダメだからといって徹底的に害

虫をやつたら益虫も殺してしまうわけでしょう。一方だけが悪いというのはあり得ないわけです。あるいは窒息、水俣の方にも後ほどビデオを見ていただきますけれども、加害者、被害者という図式は成り立たない。かつてはそうだった。今頃生活排水の場合はどうでしょうか。

お名前は。徳嶺さん、生活排水の場合に加害者ですか。被害者ですか。

○ 徳嶺

私は加害者ですかね。

○ 谷口

加害者でもあり、被害者でもあるということですね。

そうすると、結局、そう単純に加害者、被害者の図式、それから益虫、害虫の図式、人間と環境という分ける図式、客観と主観というふうに分ける、そういう図式があてはまらなくなってきたということが、おわかりだと思います。どちらも同じ対等の値打ちなんだ、だから相手の立場に立てるということにもなってくるかと思います。

要するに、その水俣病などの公害問題の時のような加害者、被害者の図式が成り立たなくて、ちょうど私、神戸の方ですが、琵琶湖からの水が途中の人が誰かが中性洗剤で汚して、それが入り込んで、私が飲んでいて、被害者、ところが私の家がそのところで中性洗剤使ったとします。下の人は結局、やはり被害者で、私が加害者になります。ですから、そういうところでは、私とあなたという立場は、いつも相手

の立場になって考えていく必要があるだろう。そういうふうに思います。そう単純に割り切れない状況。

今のところ正反対なものは一致する。生まれてくるということは死ぬ思いがあってこそはじめて生まれてくるということになります。ですから赤ちゃんの立場に立っていく場合には、お母さんは生みの苦しみと同時に赤ちゃんは生まれの苦しみがあつてはじめてヘソの緒から肺呼吸に変わっているということになります。

次、お願ひします。

ここは破水して、頭だけが出てきたところです。

次、お願ひします。

25秒後、もうはっきりと目を開けます。ヘソの緒をつけていてもはっきりと目を開けて、何を見るかというと、お母さんを確認します。命と命のふれあいです。数日間は五感がフルに動いているです。お母さんが安心して、自分はこのところで生まれてきたが、確認できると数カ月感性は少しばけます。それは次への準備です。

次、お願ひします。

ヘソの緒を切って、次、お願ひします。

もうこれ、生まれて5分でこれだけしっかりした顔をしているんですね。ですから、例え赤ちゃんであっても、やはり人格生を備えているというふう

にいってもいいのではないかというふうに思います。それは胎教というの

ものすごく大事ですね。だからお母さんが夫婦ケンカして怖い目をした、あるいは怒ってばかりいたというと、アドレナリン、ノルアドレナリンが出て、ヘソの緒を通じて、ホルモン系ですけれども、そういう臆病な子どもができたり、それから怒り、カーッとなる子ができたりすることがあります。したがって、生まれてから数分後だけではなくて、1年間の間はやはり胎教というもの、これは非常にリズムですね。赤ちゃんはお母さんが抱く場合、皆さんご存じかどうか、右手にお母さんを始めて抱くときには抱かないんですね。左側の方に抱くんですね。本能的に。なぜならば、その場合、よしよしと言ったら泣きやみます。いくら泣いていても、なぜかというと、左の方に心臓があるからです。心臓のリズム、鼓動を聞くことによって自分の母親の本当の意味の懐に抱かれているということになります。ですから、全てがリズム、最初に言いましたように1年間の四季のリズムが大事だといいましたけれども、やはり心臓脈の音というものがベースになっているということも知っておいてください。

次、お願いします。

命の教育の中において、やはりどうしても大事なものは、死というもの、そういうふうなものを経験することだろうと思います。死がない、もう一度生と死は同じだといって、もう一つピンとこないかもわからせんので、具体例をあげておきましょう。ガ

ン細胞は死なない細胞だというのはおわかりだと思います。普通の細胞は40回細胞分裂したら終わります。ですから、われわれの生命体というふうなものを維持する、要するに生を維持しようとと思うと、41回目には滅びてもらわなかつたら生命体は維持できないんです。ところがガン細胞は絶対に死なないわけ。そうすると生のプログラムばかり。これはあり得ないと言いましたけれども、それをやるから全体の生命システムが崩れてしまうんです。ですから、死なないガン細胞は生命体を滅ぼす、古い細胞が死ぬことで新しい細胞が生きる、だから生と死は表裏一体しているということもおわかりだと思います。哲学の詭弁を使つたいるのではないです。生理学的に、医学的にそうだということなんです。

そういうところもでいくと、全体のシステムが大事だ。まずこれは生命体、われわれの命、身体全体です。もっといいましょう。われわれの生命体が今度地球のエコシステムを作っているわけですから、われわれもやはり循環していくかなかつたらいけないということになるかもいます。そういうふうなところまで広げていくことができるだろうと思います。

それからもう一つは、今、学術会議の方で少しいろいろ問題になっているのが、学校において命とふれあい、環境教育も含めて、命とふれあいということで飼育動物の問題が多いに問題になっております。例えばウサギなんか、

日本の学校は全部ウサギばかり飼うんですよ。ひまわりの観察と、ひまわりばかりやるんですよね。全く個性がない。各地域に応じた命のふれあいがあってもいいと思うんですね。具体的にはそのウサギが増えると数百匹増えてしまっていて、どうしようかということになる。教室までウサギが入ってくるとか、そういうことが起こっているわけです。それはかわいいときだけやるからそうなっていくわけでしょう。本当はそんなに増やさないで小さいときから死ぬまでを面倒見るのが環境教育だと思う。

だから、生のときから死ぬとき、だからせひぜひ、もしこの中で親御さんがおられた場合、子どもさんが犬を飼いたい、猫を飼いたいといった場合、飼わせてあげてください。特に犬の場合、自分が飼ってみて、あんな悲しい思い嫌だといっても、それはご本人だけ。子どもさんがやはり生まれたときの喜び、かわいらしさ、そして中堅になって歯が伸びてきて何でも噛みます。そのときに憎たらしく、顔だって伸びてきて、間の抜けた顔をしますから。そういうふうな状態。それから今度は赤ちゃんを産んだら、この犬がと思うくらいに母性的です。そして今度10歳を越えたら目が見えなくなって、よぼよぼして、柱にぶつかる。かわいそうな哀れさ、要するに老いと死というものも全部含めて、子どもがそういうペットの生涯を経験することが、実は先ほどいいましたような人間の生涯の縮

図になっているわけです。

決して年寄りが能率が悪いとか、そんな問題ではない。汚いとかそんな問題ではないはずなんです。そういう意味では、やはり生命の誕生の喜びと死の悲しみもやはり環境教育の中においては経験する必要があるだろうと思います。

次、お願いします。

客観的な科学教育とともに、やはり主観的な想像の世界をある意味では擬人化すること、そしてそのものになりきるということ、そういうふうなことも大事だと思います。ただ、今、小さい子たちを見ていたら、何とかごっこということをあまりやらないですね。お母さんごっことかお父さんごっことか、それはごっこすることによって相手の役割分担を経験してみるわけです。そういうふうなことがないというのは本当に個としても。パソコンがある、ファミコンがある、その中に入り込んで、自分が確実に守られてしまっている。そういうことになりますので、やはり何とかごっこという形で感情移入をすることだと思います。そういうことも必要だと思います。そして、「わー、かわいい」という共感というふうなものもいろいろと培っていく必要があるだろうと思います。

次、お願いします。

それで、環境倫理のお話もしていきたいわけなんですけれども、環境倫理も生命倫理も同じものなのだということだけ申し上げておきたいと思います。

ちょっとだけ端折りますが、どういうことかというと、生命倫理、バイオの考え方、それでトウモロコシがあります。トウモロコシで結局害虫が付かないトウモロコシ、そうすると害虫が食べると死んでしまうわけです。アメリカなんかの場合に、日本なんかもどうなっているのかはっきりわからないような状況ですが、ヨーロッパは確実に輸入禁止になっていますね。

その場合にどういうことかというと、確かに農薬をやらないでいいからバイオの技術でいいじゃないかという発想があります。よく考えてくださいね。昆虫が、害虫が死ぬわけでしょう。われわれがそれを食べて悪くならないはずはないんです。急性毒性ではないけれども、慢性毒性の問題はあるだろうと思います。ですから、そういうところからいくと、どうもその遺伝子操作ということに関しては環境の生態系を破壊していくという意味においても、実は遺伝子操作ではなくて遺伝子は同一性を保つ必要があるように思います。根本は生命倫理も環境倫理も同じです。環境倫理は生態系の同一性を保つこと、これを壊さないことです。それからあと、生命倫理、環境倫理含めて遺伝子の同一性を壊さないこと。

もう一つ、最近流行になっておりますけれども、臓器移植の問題があります。もちろんいろいろなケースがありますから、全てとはいいませんが、原則的にやはり個体というもの、われわれの身体というもの、これは同一性を

保つというのが原則だと思います。したがって、生命倫理、環境倫理に共通する同一性は3つあるだろう。生態系を守ること、個体を変形させないこと、そして全部同一性ですけれども、遺伝子も同一性を保つこと。これが生命倫理、環境倫理の基本ではないかというふうに思っております。

次、お願ひします。

ちょっとだけ、ビデオの方を見ていたら、私たちが二つのケース、水俣病と奇形サル、環境ホルモンにつきましては、もう皆さんご存じだと思いますので、これは省略します。

ビデオをお願いします。

水俣の方に2度ほど行ってまいりました。

※ビデオ鑑賞

狂牛病と同じようなアルツハイマー症の症状です。

※ビデオ鑑賞

これが鬼塚さんという方ですが、約束してなくて、いきなり来られたものでちょっと私もどうしようかなという感じです。どの程度話していただけるかわからなかったのですから。

※ビデオ鑑賞

この田中さんは、ちょうどこの当時私と同じ年だったんですが、いろいろな人生があるなと思いました。1歳のときに水俣病にかかる、神経系がおかされて、温度がわからないんです。体温が下がっていてもわからないので、周りが止めなかつたら和紙を漉いておりますけれども、バーンと倒れてしま

う、そんな状況でもありました。

※ビデオ鑑賞

ビデオを一時ストップしてください。
水俣の方の場合に、先ほどちょっと
ユネスコの話をしましたけれども、日
本の環境教育がちょっと環境教育学会
の方の役員もさせていただいてはいる
んですけども、きれい事すぎると思
います。それが野外学習を中心になっ
ておりますけれども、今のような公害
問題も含めて、公害問題ばかりではな
いですよ。これはユネスコなんかの場
合だともっと切実に、貧困の問題、差
別の問題、そういうもの、それからエ
イズの問題、そういうふうなものがあ
ります。それもゆくゆくはやはりこれ
から日本の子どもたちにも教えていか
なければならないだろうなというふう
に思っております。

今は公害の問題ではありますけれど
も、これはもう時間も経っております
ので、客観的に一つの価値観を教え込
むのではなくて、多様な価値観は知ら
せる必要があるだろうと思います。環
境教育の本質を私は一方では環境問題
を解決する構想はということではない
と思っております。一方では心豊かな
子どもを育てるここと、センス・オブ・
ワンダーです。他方、そういうような
心が獲得されて、目覚めるならば、今
度は放っておいても環境問題に参加す
るだろうと思います。循環型社会の実
現に向けて参加するだろうと思います。
だから環境教育はやはり一方で心豊か
な子どもを育てるということ、そうで

あるならば、環境汚染とか、環境破壊
の崩れがすぐわかりますから、そこで
今度は参加できる子どもに育っていく
であろうと思います。そういうふうに
思っております。

それからやはり、環境教育のテーマ
として、きれい事ばかりではなくて、
自然の厳しさも教える必要があるだろ
うし、かつての公害問題も教える必要
があるだろうし、さらにエイズの問題
なども貧困の問題なども差別の問題も
教える必要があるのではないかと思っ
ております。ちょっと中断しましたけ
ども、戻ります。

奇形サルです。

いつも国際会議をしますと、会議の
前に淡路島が近いですからご一緒
いたします。そして、ゲストの方々に
現状を見ていただきます。その上で討
論し、また、その後も引き続き関係を
持っていきます。形だけの国際会議の
場合は、「こんにちは」、「はい、さよ
うなら」で終わってしまいます。そ
ういう意味では、かろうじて私はあっち
こっち走り回っているのはそういうと
ころのネットワークを広げていってい
るということですね。パートナーシッ
プのネットワーク。

お願ひします。

これは手首からない「デン」という
サルです。 どうも残留農薬が成長ホ
ルモンに影響しているように思います。
そういうところではこういうふうに手
が曲がったり、それからこれは劣種、
こういうようなものの、手首からない場

合があります。それから9本指の足を持ったサルが生まれてきたりしています。環境ホルモンが生殖腺系ですけれども、そういうホルモンの関係ですけれども、これは成長ホルモンに関わっている感じがいたします。これはグーようになっております。合指、合わさった指です。これは5歳のデンですけれども、こういうサルたちがでているのはどういう意味かというと、成長ホルモンがどうも残留農薬の影響で止まってしまった場合、指ができなくなる。あるいは手首から無くなってしまう。今度、成長ホルモンが出て止まらなくなってしまった場合、片一方の足に9本指の足のサルが生まれたりしています。メカニズムは環境ホルモンと同じだと思います。

これは、この時生まれたサルなんですけれども、「ふみこ」といいます。3カ月目です。

学生が、やはり研究室の活動ではあります、環境教育の一環でもあります。カメラを向けておりました。そのときにこういうことが起こりました。

ビデオを止めてください。電気をちょっとだけ明るくしていただけますか。

90分いただいておりますので、ご質問はまた一番最後のときにまとめてフリートーキングのときにさせていただければと思いますが、少しだけ合いの手を入れます。非常に深刻な内容になりましたので、そればかり強調しているわけではありません。むしろ私たちには健全な環境をどういうふうにすべき

か、あるいは命というふうなものは、本当に生命力を持っているし、そのへんのところはもっともっと信頼してもいい。そして環境の回復力というのも信頼してもいいと思っております。じゃあ、環境教育がちょっと型苦しくなりましたので、もっと碎いてみましょう。私はどんな環境教育をやっていて、子どもたちを育てるべきかというのは、これに表れていると思うんです。先ほど何とかごっこをしない子が増えたといいましたけれども、もう一つ、わんぱく坊主が減ったということです。そのあたりのところを少し読んでみましょう。小学校4年生の子が妹のことを書いています。聞いておいてください。

「私の妹は一応女の子だ。小学校3年生、髪の毛が長くて、目がぱっちりしてるから、みんなが『かわいい子ね』と言う。外から見れば私もそう思う。でも、私は妹が女の子なんて信じられない。妹が今、ミミズを飼っているなんて、家族以外誰も知らない。毎日あのウジウジした長いのを掘り出しては伸ばしたり、丸めたり、走らせたり、あれが女の子のすることか。

夏休みの研究にミミズを調べると言いたしたとき、家中みんなあっけにとられた。小さい頃から虫でもベビでも怖がったことのない子だから、考えてみれば不思議ではないんだけれども、何せ相手がミミズと決まるとき、そんな研究は誰も手伝わない。

日曜日に父が少し覗いてやるだけで、

私も母も近付く気になれない。この前もベランダで、ドドン、ガーン、ピーピー、ギャーンとものすごい音がするので飛び出したら、妹がフライパンやおもちゃの太鼓をたたき、そのうえ笛を吹いたりわめいたりしている。（どうもミミズに聞かせているようです。）その前に太ったミミズが5匹、振り向いた妹はポケッと見ている私に『ミミズに聞かせているのよ』とにっこり。音が聞こえるかどうかの実験だという。（ここに科学的な発想があるんですよ。実際に自分が教えてもらったことじゃない。やってみて、反応があるかどうか見ていくわけですからね。こういう科学的知識が大事だと思いますね。）その妹がついにミミズを食べたのだ。

その日、1匹だけ解剖してみると、私の顕微鏡とメスを借りにきた。私はミミズなんか見るためには貸したくはなかったけれども、他には何も手伝ってやれないから、このくらいは我慢しなきゃと思った。でも『後でよく洗ってよ』と何度も何度も念を押した。（姉妹関係、兄弟関係がよくわかるようですね。）隣の部屋で妹の声が聞こえる。『ワー、ミミズの身体の中って、土ばかりや、血が出ている、お姉ちゃん、見てみない』、『誰が行くか、そんなところ』と思っていると、妹がまた入ってきて、（次は怖いことを言います。）『人間の血も一緒に顕微鏡で見たいから、私の血が欲しい』と言う。この子、ドラキュラかと思った。でも、聞いてみたら、私がこの前怪我をして、

かさぶたになっているところをめくってくれというのだ。（妹は妹で気をつかっているんですね。）よくそんなことに気がつくなど半分びっくり、半分ホッとして、（お姉ちゃん優しいですよ）めくってやった。

解剖が終わったらしく、ミミズのお墓を作ってきた後、妹は急に言いだした。（この急にと言うのが怖いね、急にインスピレーションが湧くわけですが、）ミミズって薬になるんだよね、（解熱剤ですね。）だったら食べても毒やないね、私、食べてみる。母は止めた、私も止めた。でも、妹はさっき埋めたミミズを掘り出してきて、水道で洗っている。さすがに母は（自分が生んだ子ですから）諦めが早かった。

台所へ行くと小さなお鍋を持ってきて、『せめてゆでて食べて』と、それを妹に渡した。ゆでたミミズは真っ白でホルモンに似ていた。私と母が何も言えないで見ている前で、妹は味見をするようにゆっくり噛んでみて、『苦くとも何ともないわ』と言うと、そのまま飲み込んでしまった。私は完全に妹に負けたと思った。」

ちょっとだけ深刻なテーマになりましたけれども、それもやはりわれわれは視野に入れておかなければならぬと思うんですけれども、先ほどから言っておりますように、環境教育を目指す人間像、教育像というのは、一方でやはり心豊かに、心豊かにといつてもきれい事ではない、わんぱくもするでしょう。いろいろなことをやる。わん

ぱくをやるからこそ面倒見がいいんですね。そういうふうなものの秩序もなくなっていて、人間関係も無くなってしまったことが問題です。だけれども、『センス・オブ・ワンダー』です。感性というふうなものが、いろいろなところに開き、驚きの気持ちがあるということであるならば、そうすると今度いろいろな崩れですね、人間関係の崩れも含めて、環境問題も含めて気がつくし、そのままではじっとしていない。そういう子どもたちを育てるのが環境教育の目標ではないかと思っております。

少し話を戻します。

質疑応答の時間までちょっとだけ講演の方の時間が延びておりまして恐縮ですけれども、そのまま40分まで続けていただきます。後で質疑応答のある方は後ほどお答えしたいと思います。

それでは、もう1回、元へ戻りまして、CD-ROMの方にいきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

環境問題、そういうふうに実際に私たちがずっと20年来関与しているのは水俣病であり、奇形サル問題であったわけです。環境ホルモンにつきましては、ぜひぜひ、これもよく日本人が『複合汚染』が大ヒットしたら、一時はものすごくヒステリックになって、またさっと忘れてしましましたね。隅田川に魚が戻ってきたと、それで終わってしまいました。そうではなくて、

やはり考え続ける必要がある。環境ホルモンの問題もそうだと思います。

次、お願ひします。

今、命の問題に触れてまいりましたので、環境はどのように形成されるか、万物は流転するということ。一つとしてじっとしていられないということを知っておいてください。散逸構造論、ちょっと難しい言葉があります。これはエネルギーというものができたら、それがずっと消費されていって、散逸していきます。それを意味します。そのプロセスの中に形態が、形ができあがり、命ができあがっていくという説です。どういうことか。蛇口を出します。ゆるめます。そうするとバーと出るんだけれども、その蛇口の形、水の形ご存じですか。

○来場者

真っ直ぐ下に落ちていく。

○ 谷口

ストンとは落ちてない、渦を巻いて落ちていくんです。そのままストンとじゃなくて、渦を巻くように落ちていく。それはわかりますよね。エネルギーが効率よく発散されていこうとするプロセスの中には、一番構造、形を作っています。そこで命ができあがります。もうちょっと言いましょう。

台風が発生して、成長して、そして死んでいくという言い方がありますね。これを無機物ですけれども、そういう形できあがっていく。先ほど白鳥の写真を見ていただきましたけれども、絵を描くVの字になって飛んでいきま

すね。これも形なんです。一番最初のところを飛んでいたら、横側に行った方が気流がうまく乗れるんです。真後ろよりも。そうすると左右の方に気流ができあがっていって飛びやすい状態の中に乘っていくわけです。エネルギー、抵抗力が一番少ないように飛んでいるんです。そこで形ができあがっていくんです。散逸構造論というのは、全てのものが万物流転する中において、エントロピー増大の法則、要するにエネルギーがどんどん増大していくばいくほど散逸して崩壊していきます。そのプロセスは一番効率よく崩壊していくんです。その途中で形ができあがり、命ができあがっていく。ですから繰り返しが必要だといいました。浜辺に繰り返し、繰り返し水を打ち、そのところの中において形ができあがって、命ができあがっていくんです。ボーダーラインが大切だというようなことを申しましたけれども、そういうような考え方があります。もう少し具体的に見てみましょう。

次、お願いします。

外の形も内側の形も表面の形も私たちは同じもの、同じ形としてできあがっていきます。人工衛星から見た場合ですけれども、コロラド川の形はこういう形になっています。それから生命体、個体の表面、これは昆虫、トンボの羽の支脈です。これは木の葉っぱの葉脈です。同じような形を持ってできあがっていっています。そこへ持ってきて、私たちの胃のところにできる

毛細血管、身体の中、個体の中も同じ論理、同じメカニズムでできあがっていきます。外の世界も個体の表面の世界も、個体の中の世界も全部同じ作り方でできあがってきます。先ほど時間が圧縮されてできたというのは胎児の話をしました。これは空間の中に表れた形、形態というふうなものも同じ論理、同じメカニズムでできあがっているということを知つてほしいんです。あるならば、私たちの身体があって、外のところの形態、環境を壊していくということは自分の身体を壊していくことになります。

水俣の話をしました。《神村ともこ》さんという胎児生水俣病の方がおられました。彼女の場合、羊水が汚染された。それは有明湾の海を汚したわけです。人間が。そうすると内なる海、羊水を汚染したわけです。そして胎児生水俣病の患者さんとして生まれてきたわけです。ですから、外の形態、外の環境を壊すことは、私たちの内なる環境を壊すことになります。そういう意味でも自他は分離していない。つながっている、時間的にも生命の歴史でつながっている。空間的にも外の世界を壊すということは非常に大きな問題がくる。私たち自身も壊していることになるということになります。

次、お願いします。

環境教育の場合に事例集のマニュアルとか、教科書のカリキュラムなどがありますが、今、環境省の方がいっているのが、モデルプログラムをつくっ

てほしいというふうにいわれています。誰でもいつでもどこでもそれを使えばできる。誰でもどこでもいつでも、そのモデルプログラムを使えば環境教育はできる。そういうことが要請されていますが、なかなか難しいことです。学校のカリキュラム。

次、お願いします。

それから、環境倫理ということでもありますが、ちょっとだけ特徴で、普通の倫理とは違うということを知っておいていただきたいと思います。私たちの時代だけではなくて、次の時代に對して資源を送るということです。あるいは汚染してしまったものを次の世代に送ってはいけない。現代世代が資源とかそういうふうなものを使い切ったり、あるいは今の環境を汚染してしまって、次の世代へ送ってはいけない。これは世代間において考えなければならない。これが従来の倫理学とは違うところです。また、配分の公平性、南北問題というふうなものが地球環境破壊を生んでおります。また、未来世代と現代世代の配分の公平性というふうなもの、資源の公平性というのもも考へないといけない。それから生態系の同一性、先ほどからいっております。やはり全体の生態系、エコロジカルシステムを壊してはいけない。動物、植物の権利というふうなものも、動物や植物に代わって人間が守る必要がある。権利と義務の拡張というふうなものが環境倫理の原則になります。

次、お願いします。

終わりの方に近付いてまいりました。環境問題の現状と環境教育の展開ですけれども、中国の方によく行きます。現状を見ていただきたい。それから次は、エコツアーと環境教育ということで、自然の公園に行きました。カナダの里山活動を少しご紹介しておきたいと思います。

次、お願いします。

内モンゴルに行った途中にたくさんある《合賀》企業が中国ではあります。国が経営していたのが村の方に預けられて、古い設備です。ここで廃液とか排気ガスとかを垂れ流しになっています。この状態でいきますから、もう本当に水俣病なんか潜在的に、あるいは顕在的に出ているはずです。けどそれはなかなか政府は認めませんけれども。

次、お願いします。

それから陽泉市教育委員会の方で講演したときですけれども、くず山がありまして、こここのところはスマッグ状態です。くず山の石炭というのは本当にカスばかり、5つ山があって、放置しておくと自然発火します。それをシャベルでもって、あるいはこういうふうな泥水でもって上方を消しているわけです。だけどこれは強い風のときにはまた自然発火するわけです。そうするとこういうガスが陽泉市全体、それから中国全体、そして日本の酸性雨の7割近いものが中国から来ているといわれますけれども、日本の方に降ってきてているわけです。ですから区切りというのは、人間が勝手に国境という

区切りを作ったにすぎないわけでしょう。環境問題は区切りを越えていくということでもあります。そういう意味では地球単位で考えていかなければならないだろうなというふうに思います。

もう一度いいます。生態系は循環する、自己回帰する、自己へ戻ってくる、そういう論理があります。日本の大企業が陽泉市のいい石炭を買い占めます。中国の人たちはクズの石炭で生きています。それがスマッグ状態になって、また日本へ入ってくるわけでしょう。だから一時、自分たちだけが得したようになっているけれども、それは全部にはらまいていることになります。だから他人の問題ではないんです。こういうパートナーシップの発想、グローバルなパートナーシップの発想が必要だと思います。

次、お願ひします。

こういう状態です。

次、お願ひします。

それから、内モンゴルのところの《ほうとう市》で、これは今らか言いますと昭和40年代の設備です。

次、お願ひします。

99年ですけれども、マスクも付けない状態でみんな労働しているから、やはり病気になったりするというのは当然のことだと思います。

次、お願ひします。

《かおやい》自然公園ですが、非常の大きいですね。自然公園というと、普通、野球場の10倍くらいだと思われるかわかりませんが、そんなところで

はなく、大阪府全体の広さがあります。そういう所に時々学生たちを連れて行っております。

次、お願ひします。

バードウォッチング、朝早く起きてしたり。

次、お願ひします。

サルが出てきたり。

次、お願ひします。

ナキジカ。

次、お願ひします。

大きな、場所が違うと虫の大きさも違います。

次、お願ひします。

キノコもいっぱい、ジャングルの中へ入っていきます。

次、お願ひします。

こういう、こちらの方はガジュマルがたくさんありますよね。マンゴープもあるんですか。まだ見てないので、昨日来たばかりなので、ぜひ行きたいと思っていますが、またこれはこれで大きな規模であります。

次、お願ひします。

ヒルなんか大丈夫だと思っていたんです。細い細いこんな小さいイトミミズみたいだと。ところが一回り回ってきて、おかしいな、これは私のちょっと汚い足で恐縮ですけれども、こここのところに穴が開いていますでしょう、イトミミズみたいなのをほっとみたらこれだけ大きくなっているんですよ。だから1匹だけではなくて、普通、その中で放浪したり、迷った場合、大変だなと思いましたね。普段あまり殺し

たりはしないんですが、この時は思わずパッと踏みつぶしたんですけども、血だらけになった周りが、それくらいひどいですね。これもやはり自然って怖いと思いますね、こういうふうなものが。

次、お願ひします。

いろいろな野菜ですね、スター・アップルとかいっぱいです。

次、お願ひします。

ジャックフルーツ。

次、お願ひします。

それから、水田など。

次、お願ひします。

パンダ等、たくさん自然に自生しております。

次、お願ひします。

これはカナダのエコフォレストリーですが、個人の山で、里山活動をしていて、今までクリアーカット、全部の山の木を切りました。必要な木がある場合は、この場合、必要な大きさの木だけを切ります。

次、お願ひします。

市民や学生たちが参加しています。奥さんなんですけども、「今からあなたの命を絶ちます」というふうにお祈りをされます。学生たちがちょうど私の学生も20人ほど行っておりましたけれども、「みんな順番に市民に参加者みんな順番に祈ってください。今から命を絶つから」ということで、決してそれを無駄にしない、フローリングとか家を作つて永遠の命に替えますというふうに奥さんの方は言っておられ

ました。私の学生がこうやったとたんに泣き出しまして、今私、この話をしているときもそのときの状態を思い浮かべますが、切り倒して、ドンという音、127年の木だったんですけども、それは今でも思い出します。

こういう実感があれば、やたらと命を絶つということはしないだろうと思うんですよ。必要最小限度頭を下げて、ありがとうございますこと、そういうふうな環境教育が必要じゃないかと思います。

次、お願ひします。

トラクターなど入れないで馬で運び出します。

次、お願ひします。

ヤクスギの方で、やはり時間感覚が40億年はピンとこないんですが、7千年のヤクスギがあるといわれています。そういう場合に、中国の歴史が6千年、7千年ということですよね。われわれが考えられる限りの認識ができるのは数千年単位だと思います。

次、お願ひします。

こういうようなところが数千年単位で守られてきている。

次、お願ひします。

やはり春、夏、秋、冬のこの7千年杉ですけども、顔の表情が違います。

次、お願ひします。

これは夏です。

次、お願ひします。

秋。

次、お願ひします。

冬。こういうリズムが必要でしょう。

次、お願いします。

ヤマグルマなどが、この数千年の木を切り倒します。私たちがいうと、これは数百年で切り倒すわけだけれども、杉から見たらヤマグルマがきたら、「エライ、人殺しが来た」と思っているかもわかりませんね。数百年単位われわれは生きていなかからわからないけど、杉の立場になってみた場合、ヤマグルマが来たら確実に自分を絞め殺すというのはわかるわけでしょう。数百年単位で。やはり、われわれが物事を見る目は数百年、数千年単位で見なければならぬだろうと思います。

次、お願いします。

この空間というのも、やはり、オンラインアースといわれますように、かけがえのない地球という空間単位で考える必要があるかと思います。

締めくくりにしたいと思います。

そういうことで、一通りレジュメの方の4番のところまで済ませたかと思います。やはり私たちが環境教育をやっていく場合の時間のスパンというのが数千年単位で考えていく必要があるように思います。そして、空間的には、やはり地球単位で十分ではないかと思います。そういうところから、環境教育の軸、時間軸、空間軸というのは出てくるわけですけれども、今日お話をさせていただきましたのは、皆様方とまた後ほどお話ができるここと、要するに情報交換と共に、頑張っているなどいうことで勉強させていただくことなんです。要するにパートナーシップを一

方でローカルに組むと共に、他方でグローバルに、やはり継続していきたいし、そういうところも、ぜひぜひご支援を願いいたし、こちらも今後いろいろとご協力させていただきたいと思います。

少し時間が長くなりましたが、ご静聴ありがとうございました。

活動発表

○ 儀武園子(琉球ジャスコ株式会社 環境社会貢献課 課長)

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました琉球ジャスコ環境社会貢献課の儀武と申します。よろしくお願ひいたします。

企業は、さまざまな形で社会貢献活動をいたしておりますけれども、本日は私たち当社の社会貢献活動、特に環境をテーマに企業が取り組んでいることをお話ししたいと思います。まず、私たちの店舗、20店舗ございますけれども、1日約平均して10万人のお客さんがご来店になります。店舗にお買い物に来られるお客様は消費者という立場と、それから別の側面からいうと、市民という立場で見ることができると思います。店舗の役割というと、その市民という立場を考えた場合に、私たちがやる役割って何だろうということを考えると、まず一つ目は、場の提供、それから二つ目は自らの行動、私たちの行動です。それから3点目は子どもたちへのメッセージ、4点目は環境への啓蒙という役割を担っていると思います。そういうコンセプトで不十分ではあるんですけども、私たちが活動していることを少しお話したいと思います。

まず、1点目でございますけれども、こちらの方は、お客様を原点とした福祉地域ということで、毎月1回各店舗周辺の清掃活動を実施いたしておりま

す。2001年度、ジャスコがイオンという名称に変えましてからは8月11日に漫湖の清掃活動を約250名動員いたしまして、こちらの方はコンベンションビューローと共に実施いたしました。以降は毎月11日、今日なんですかれども、4デーと決めて継続的に活動をいたしております。

また、イオングループで行っているクリーンロードは、これに併行いたしまして国土交通省の道路の清掃美化活動と共同で2002年1月より沖縄県下12店舗で実施をいたしております。

続きましては、里地保全活動を実施いたしておりますけれども、こちらの方はイオン環境財団はN G O里地ネットワークと協力して全国各地で地元のN G O、自治体の皆様と一緒に里地保全活動を実施しております。こちらの映像は2001年度の12月、恩納村で美しい里地、沖縄は里地里山といわれるほどのものがございません。それで里地づくりということでかまと作りをして、そちらでユシ豆腐作り体験をいたしました。

つづきまして、「幸せの黄色いレシート」について少しお話をしたいと思いますけれども、会場の中にもジャスコが取り組んでいる「幸せの黄色いレシート」のことはご存じだとは思いますけれども、これは2001年10月の4デーから実施いたしております。「幸せの黄色いレシート」キャンペーンは、

お客様がレジ精算時に受けられた黄色いレシートを専用ボックスへ投函していただくと、お買い上げ金額合計の1%が地域のN G O、あるいはボランティア団体などの希望される商品で寄贈されるシステムです。要するにお客様のお買い物が地域のボランティア団体の支援につながるという仕組みでございます。

続きましては、エコロジーミュージカル、こちらは「瓶ヶ森の河童（かめがもりのしばてん）」と読むんですけども、イオンの1%クラブでは公演する地域のオーディションで選出された子どもたちと劇団故郷キャラバンなどで演じる自然や森の大切がテーマのミュージカルを開催いたしております。2002年の2月には沖縄市民会館にて沖縄市を中心とする地域の子どもたち50名の子どもたちと一緒に参加をして、ミュージカルを公演いたしました。1,250名の親子でお楽しみいただけたと思います。

つづきましては、店舗で取り組んでいるのを少しお話したいと思いますけれども、皆さんもよくご存じだと思うんですけども、お客様と共に店頭リサイクル活動に取り組んでおります。ゴミを資源に戻す容器包装リサイクル法とか、あるいは食品リサイクル法が施行されて当社では牛乳パック、食品トレイ、アルミ缶の改修ボックスを店頭に設置し、リサイクル活動を推進してまいりました。2001年度は11月に皆さんのご協力のもと、I S O 14000の

法とか、あるいは食品リサイクル法が施行されて当社では牛乳パック、食品トレイ、アルミ缶の改修ボックスを店頭に設置し、リサイクル活動を推進してまいりました。2001年度は11月に皆さんのご協力のもと、I S O 14000の認証取得を機に、昨年の11月より店舗から排出される食品残さのリサイクルの実験導入を8店舗で行っております。また、本社で使われているコピー用紙、これはかなりの量が出るんですけども、古紙回収システムに乗せてリサイクルに取り組んでおります。

今年度は段ボールをリサイクルに乗せたいと考えております。一部、ジャスコ那覇店や北谷店、あるいは具志川店はリサイクルをしておりますけれども、他のマックスバリュー等々はリサイクルに乗せておりませんので、段ボールのリサイクルを考えていきたいと思います。

それから、店舗から出るトロ箱、皆さんご存じだと思いますけれども、発泡スチロールなんですけれども、こちらの方もリサイクルシステムに乗せ、それが車のビス止めに形を変えて、今年の春、オープンする予定でございますジャスコ名護店の駐車場に60基設置する予定でございます。その他に店舗ではレジ袋を削減するためにマイバックとかマイバスケットを推進いたしております。

というのが、だいたい店舗で活動しているもの、先ほど私が冒頭で話をしました店舗での役割というのは何だろ

うと考えたときに、場の提供、それから自らの行動、私たちの行動ですけれども、それから子どもたちへのメッセージ、それから環境への啓蒙というような形のコンセプトで私どもは活動をいたしております。

次に、映像はないんですけども、地域の子どもたちと共にということで、昨年度の4月にジャスコ那覇店でエコクラブを立ち上げました。エコクラブってどういう活動をしたらいいか、事務局としてもよくわからなかつたので、去年はエコクラブ23名ですけれども、その子どもたちと少し活動をしたという経緯がございます。今年はジャスコ那覇店、北谷店、それから具志川店、それから春にオープンするジャスコ名護店の4店舗でエコクラブを発足していきたいと考えております。地域の子どもたちと共に店舗を拠点と一緒に環境をテーマに活動をしていきたいと考えております。ですから、私どものチラシの中にエコクラブ募集というようなことが載りましたら、関連のお子さまをお持ちのお母様やお父様、ぜひ皆様の子どもたちをジャスコのエコクラブに参加したいというような形でお願いしたいと思います。

それから、その他に「イオンエコエコ探検隊」を開催いたしています。これは何かというと、こちらのテキストなんですけれども、全ページ、8ページになっていますけれども、この「イオンエコエコ探検隊」はお店の中で、環境にいいことって何だろうというテ

ーマでリサイクルのことや、あるいはマイパックのこと、あるいは野菜や果物の量り売り、それから環境を守り、自然の原理を大切にするために作った安全な商品の紹介、それから店舗のバックヤードにいっていただいて、店舗で使われて、汚れて使えなくなった油のリサイクルのことなどを子どもたちと一緒に考えるというようなプログラムができあがったものです。こちらを例えば小学校のお子様が20名ほど店舗見学したいというときには、このプログラムで教育をいたしております。

環境問題が人間の活動から生まれるものである以上、環境保全活動には個人、企業、国、それから世界という、先ほど先生もおっしゃっておりましたけれども、国境がないというレベルで取り組まなければならぬと思います。そして企業は企業の立場で、それをスタートさせなければいけないと考えております。そのスタートは環境問題そのものへの共通認識だと考えております。企業が環境問題に取り組んでいくために地域社会と共に考え、コミュニケーションを取って行動していくことだと思います。それが私たちが目指す企業市民だと考えております。当社の取り組みも不十分だとは思いますが、皆様のご指導をこれからもよろしくお願いしたいと思います。

それから最後に、しつこいようなんですけれども、本日は11月でイオングーです。このおきなわ環境交流集会が終わりましたら、今日の夕飯にジャス

コ那覇店、あるいはマックスバリュー、あるいはプリマートでお買い物をしていただきまして、その黄色いレシートをNPOやボランティア団体に投票していただくことをお願いしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

○ 広川ヨシ子（豊見城市立とよみ小学校 教諭）

こんにちは。この高さと私の高さが一緒になって見えないと思うんですけども、ただいまご紹介にあずかりました豊見城市立とよみ小学校の広川と申します。よろしくお願ひいたします。

聞いたことはすぐ忘れ、それから見たことは思い出す、体験したことはちょっとだけ理解する。そして自分で発見して、自分から進んでやったことはだいたい身に付くと、これは古いことわざらしいんですけども、これを出発にしてレジュメの方を端折ってやりますけれども、私が、このような場に立ったというのは確か去年変なことを言いだして捕まえられたという感じがしてなりません。会場の中にも、また、大変ご専門の先生方がいっぱいいらっしゃるだろうと思うんですけども、その方たちを前にして発表というのはちょっとといまでもガタガタ震えていませんけれども、すみません。言ったことは忘れてください。聞いたことも忘れてください。

皆さんの方に資料が届いているかと思いますけれども、私たちのとよみ小学校というのは、文科省から3ヵ年の総合的な学習ということの教育課程の改訂ですか、その研究開発校であって、これがスタートしたのが今年度なんです。実際にあちらこちらで総合的な学習というのは何だろう。たださせて、口の悪いのは、遊ばせて、それでいいんじゃないいか、子どもを楽しくさ

せていればいいのではないかということともあろうけど、やっぱり体験だけの、体験させっぱなしではなくて、やっぱりそこに何かを得るということだと私は考えております。

そしてよく、先ほどの講師の先生のお話にもありましたように、最終的には思いやりの心、命の尊さということに結びつくであろうんですけど、ここでさしつけ私の発表はごく子どもたちの普通の、普段の生活の中から拾ってやつていきたいと思います。

まず、子どもに環境をと聞いたら、地球温暖化というのがすぐ来ますね。地球温暖化とか、それから環境ホルモンとか、そういうのがすぐきましたけれども、じゃあ子どもたちは何で知ったかというと、インターネットとかテレビとかと、これが現実の生活には結びついてないと思うんです。具体的に私も地球温暖化といわれたら、何のこととかとパッと言えません。それよりもやっぱり普通の生活、食生活、あるいは健康生活、地域の人々との交流の中で子どもたちを引き上げていくということを私は環境を見直そうという軽い気持ちでいろいろ環境を議論したらきりがないと思いますけれども、ごく軽い気持ちでお話しします。

まず、子どもの実態を見てみると、最近の子どもはみんな明るいですよね。明るくてものおじしないです。先輩も後輩もクソもあったものではないくらいです。とにかく今流行の言葉で言えば「チヨー明るい」という感じですけ

ど、ところが誰々のためにというとなると、友達や学校、学級、あるいは学年、地域の人のためにとなると、これをやる子は少ないと思うんです。それから体験が乏しい。

先ほど、ウサギとか出てきましたけれども、学校の裏の方に、ビオトープと言えるかどうかわかりませんが、ちょっととしたのがあります。かわいらしい池が。そして、そこによくトンボが飛んでくるんですけども、マングローブとかヒルギとかを植えておりますけれども、トンボが飛んできてもあまり振り向かない。それで、あの子がトンボが飛んでいるというけど、どんなして捕まえるかわからない。私たちはよく捕まえて、探って、皆さん経験あると思うんですけども、私はよくめん玉もちぎって、羽も片羽をちぎって飛ばしてみたりしてやって、今だったら本当に恥ずかしいというくらいの経験を一応しました。

ところが今の子どもたち、「イヤー、キャー、怖い」それだけで終わるんです。それで、汚いものにもは目を防ぐということです。だから最後に私たちの学校の総合では「地域素材の教材化、特色ある学校づくり」というのが大きなメインなんです。テーマなんです。幸いにも漫湖という湿地があります。子どもたちは行く行くといって、子どもたちは本当に漫湖に出かけようかというと、本当に漫湖探検に行くのが楽しいかというと、そうではないと思うんです。学校から、教室から、むさ苦

しい、先生方のがみがみ声から逃れるために開放感を味わって行くのではないかなと、内心はそういうことを思ったこともありますけれども、今はやはり、先生方の3カ年の努力があったせいでしょうね、やはり地域の漫湖探検に行くということできちつとしたことが姿勢で探検に出かけております。

要は児童の、先ほどの講師の先生の話がありましたけれども、児童の実態というのは、一番ここが大事だと思うんですけども、例えば教室の中にチリとかいろいろなものが落ちていてもずっと子どもの様子を見てみると、机と机の列の間に物が落ちていて、さて、この子は取るだろうかと思ったら、取らないんです。そして、気づいてないんだなと思ったらそうではないんですね。それをちゃんと踏まないで行くんですね。ということは気づいているわけですよ。ところが拾わない。注意をすると「拾いなさい、物を取りなさい」と言ったら、「僕がやったんじゃない」ということが実態として、これは私どもの学校において、どこの学校でも、私の学校はむしろいい方だと思います。とにかくどの学校でも日本全国そういう傾向だと思います。

やはり、汚い物には目を背けるということがあります。そして何でもよく知っています。やっぱり物知り博士です。何でわかったのか、最近は図書館の本で調べたということはいいません。何と思いますか。インターネットで調べた、もうすぐ世界の情報が入ってき

ます。それで、「どこどこの国はこうよ、先生わかる?」、「あんた行ったことがあるの?」インターネットで環境の出前があるわけです。

そういうことになって、一番大事な、身体を動かさない。手を動かさない。もちろん足も動かさない。とにかく座っているながらにしてどんどんそれが入っていくるということなんです。ちょっと厳しいことかもしれないですけれども、最近、IT教育も入ってきて、ちょっと水を差すみたいですねけれども、そういうパソコンとかいろいろな物が入ってきました。ただそれだけやっている。携帯電話、親指の芸術ですよね。親指でパパパッと、本当に芸術みたいです。お互い教師だってそうです。悪口みたいだけど、一般的に、どこの社会でも会社でもそうだと思います。あいさつしてもきかない。「おはようございます」と言っています。「聞いていますか、あいさつ」、「うん、聞いているよ」、「おはようございます」、「おはよう」と、顔も見ないです。顔と顔が向き合わない。顔の表情がわからないというような感じで、これが今ちょっと私たち現場にいる者としてちょっと怖いなと実感しております。

子どもたちと漫湖観察に行きますと、野鳥観察とかいいますけれども、野鳥を通して何が見えるかということです。ただ野鳥、何がいるチューサギがいる、ダイサギがいるとか、そんなものではなくて、それを通して何が見えるかというところに私たちの環境教育という

んですか、環境学習というのが、私は実践してきてそういうことを感じております。

今度、学校の枠、学校だけで環境教育だ、なんだかんだ言ったって、それが地域とか家庭に降りてこない。だから学校は学校で空回り、家庭は家庭、地域は地域で、それがうまくかみ合わないということですね。だからやっぱり学校の枠を取っ払ってやっていく、線を引かないということも大事じゃないかなと思う。

だから、この資料にありますように、広い視点に立っての環境教育と、学校、地域、家庭、あるいは逆に学校、家庭、子どもとして地域に行くとか、この線の引き方もどうでもいいと、どうでもではないんですけども、みんな相作用をしていると思うんです。3つの核がうまくかみ合わなければ、環境問題は取り組めないのでないかなと思っております。

でも、子どもたちは、やはり最近何かといったら、「会とか催し物があつたら何をするの?」といったら、すぐエイサーが始まる。子どもはただ心楽しくする、エキサイティングするようなものだけに目が行きがちです。だからやっぱり地道なことをまめにする、それを認めてやるのが社会というものですか、本当に子どもたち、頑張っている子はいます。

先ほどウサギの話も出ましたけれども、うちの学校で、私、飼育も担当しておりますけれども、獣医さんより獣

医じゃないかなと思う子が、ウサギが病気になったら、犬猫病院に連れて行きまして、獣医さんが、これはウサギのガンだよといったら、お尻から抗生物質を入れて、これも彼女がやって、ウサギに薬をやるというのは大変なことですよ。私もやってみましたけれども、鼻にやっているのか口にやっているのかウサギはわからないんですよ。それを捕まえてやるということも、子どもはそれで、このウサギ、連休に入りましたら子どもが連れて帰るんですよ。そして週明けに、「先生、ごめんなさい。こんなしてやったんだけど、死んでしまった」と涙を流していて、今でもずっとこのウサギを担当して、ウサギのミルクを買うんだとか、そういうことを私どもの学校である女の子がやっておりますけれども、やはり生命の尊さ、命の尊さというのは人間も動物も一緒だと思っております。

そして、先ほど先生のお話にもありましたけれども、子どもたちと共有する、協働というんですか、協働する場がないというのが、場はあるだろうけど、それをうまく子どもたちができない。うまく使いこなせない。例えば、「昨日誰々君と遊んだよ」というと、「ああそう」、「僕も一緒に遊んだよ」、「ああそう」3名一緒に遊んだんですね、A君、B君、C君、何をして遊んだかと聞いてみると、A君は家でテレビを見ていた。B君はというと、A君の家で漫画を見ていて。C君はというと、A君の家でゲームをしていた。そ

それぞれ分裂しているわけですよ。じゃあそこで一つのことを共有できたかというと、こういう体験がいま少ないですね。ということを最近よく子どもたちの会話の中から、それが聞かれます。

それから、環境問題って、やっぱりグローバルに考えてローカルで、足元からというけど、はたしてローカルに考えて、ローカルでもいいのかなと私は時々子どもたちの場合は思う場合があるんです。やはり自分の周囲から見ていかないと、それが次第に他のみんなと結びついているということはわかるんですけども、やはりよく環境教育の本なんかを見ると、グローバルに考えてローカルに働くということはありますけれども、やはり私は、ローカルにみて、ローカルでやった場合はどうなるのかなということも、今、考えております。

そして、やはり何をどう教えるかではなくて、何を学ばせていく、学び方、こういうことをきちんと環境教育で取り組んでいれば、それがこの子たちを送り出した場合にやはり今でいう、文部省は「生きる力を付けるため」、あるいは生き抜くのかわかりませんけれども、自然について、今、すぐこれをやったから、すぐ答えが出るというものではないと思うんですよね。私は今、小学校の方におりますけれども、そういう基礎力というんですか、基礎基本というんですか、そういうのを身につけて送り出せばいいのではないかなと思っております。

そして、環境教育というのは身近な問題で、本当に本当に、ごく普通の生活の中にある、少なくとも今子どもたちはよくゴミ問題をやっております。うちのところでもエコクラブが朝、「先生、今日はペットボトルが多くた。休み明けだからペットボトルが多くた」と、これは私たちが言わなくても、子どもたちが自然にやっておれば、子どもたちがそれいろいろなことを得てきます。力を自分で付けていきますね。ただそこを、側にいる大人が「ああ、そうね」ではなくて、一言言葉をかけ、声かけ、これを共感できる大人というのがまだ少ないのでないかなと。いたにしても、じゃあやりましょうといったら、また人と関わってくると、またノーというんですね。だからやっぱり人と人との関わりの中で、その環境教育を進められたらいいかなとは思っております。

以上です。どうもありがとうございました。

○ 田中幸雄（NPO法人 沖縄海
と渚保全会 理事長）

ただいまご紹介いただきました海と渚保全会の田中です。大変緊張しております。昨日も、夜1時間おきに目が覚めて疲れなかったんですけども、今日は私は沖縄の海のことについて、そして私たちが今取り組んでいる海浜環境教室、そのことについて少しお話をさせていただきたいたいと思います。

資料の中に1枚A4があるんですけれども、実は私たち、NPO法人設立して2年半になります。その前に私が25年前に30歳のときに、この沖縄を旅しまして、宮古島、八重山、石垣へ行って、この海の素晴らしさは本当にすごいなと、そんなふうに思って、ずっと16年間ダイビングで通って、今から9年前に沖縄に住むようになりました。いざ実際に自分が住んでみると、沖縄の海岸に非常にゴミが多い。そのことを感じまして、今度は掃除をし始めるんですけども、掃除を始めて、何回も何回も掃除をして、日曜日午前中に掃除をすると、その日の夕方にはまたゴミが溜まっている状態なんです。これは困ったことだなと。

掃除をするだけではダメだ、捨てるゴミもすごくたくさんになりますし、海外から流れてくるゴミも、ものすごくたくさんありますし、じゃあこれをどういうふうにしたら少しゴミをなくしていくことがで

きるんだろうか。これは子どもたちと一緒に取り組む以外にない、そんなふうに感じたんですね。

それで、子どもたちと一緒に海浜環境教室をやったり、一緒にビーチ掃除をしたり、このレジュメの方にあるんですけども、3行目のところに、行政、団体、企業、学校、そしてボランティアが連携を図り、各施策を同時に実践し、継続しない限り海浜の美化と保全は少し難しいのではないだろうか。そんなことがあって、私たちとしてはできることは、今できることが何なんだ。それは掃除をして、一過性ではあるけれども掃除をして、地元のビーチをきれいにしていこうと、そしてきれいでいることをアピールをする。もっともっと沖縄の海のことに関心を持ってくださいという、そういうアピールも大切じゃないだろうか。アピールをすることも非常に大切であって、それも子どもたちと一緒にできたらいいな、そんなふうにも考えています。

教育と指導者の育成ということ、この4つが非常にこの沖縄の海浜の環境をこれから少しでも改善するためには、こういうことを同時にやっていかなければなかなかきれいにならないかな、そんなふうに思って、まず、教育の取り組みというところでは、私たちが海浜環境教室ということを考えています。この海浜環境教室というのは、私がまだ一

昨年からやっと取り組んだばかりですから、まだ20回ほどしか担当させていただいておりません。その開催の方法なんですけれども、学校から依頼をされて行く場合と、それからPTAの皆さんからの依頼で行く場合、あるいは団体、そして企業の皆さんから依頼をされて行く場合があります。これがほとんどです。あと、社会福祉協議会の方からの依頼で私たちが行く場合もあります。あるいは海上保安庁の海上環境課の方からの依頼で海浜環境教室を小学校、中学校、高校で、のべ20回くらいやっております。

その方法としては、清掃、まず実際に清掃体験をしてもらって、ビーチにどんなゴミがあるんだろうか、そういうことを一緒に話ながら、実際に清掃の中でやる場合があります。

それから方法2として、講義だけで終わる場合があります。講義だけですと、なかなか難しいんですけれども、時間があるときには講義をした後に話をしたり、こういうスライドをこれから見ていただくんですけれども、こういうスライドを見て、話をして、沖縄の海の現状がどういう現状なんだろうか。そういうことをみんなで今度はグループ討議をして、各グループで子どもたちがどうやったらきれいになるんだろうか、このゴミの状態はいったいなぜなんだろうか。そういうことを考えてもらって、グループ討議をして、発表

する場合があります。

それから、今度3番としては、講義後に清掃の場所に行くわけなんですけれども、1週間から2週間、あるいは学校の方の時間の都合によつては1カ月後にビーチに実際に出る場合もあります。これが非常に私は効果的ではないかなと思うんです。話をして、みんなで考えてもらって、そして実際にビーチに出てゴミの掃除をする。

今度は、清掃をただするだけではなくて、中学生、高校生になってきますと、先生方と一緒に相談をして、ただ単に清掃をして、1週間、2週間後に、子どもたちが同じビーチへ出たときに、自分たちが掃除をする前の状態と同じ状態になっていたら、子どもたちは何を感じるんだろうか。そういうことが現実なんです。ですから、ただ単に掃除をするだけではなくて、中学生、高校生の場合にはゴミの調査をします。どういうゴミの種類があるんだろうか。そして今度は調査をしたものを作成して、分析して、それを自分たちでなぜなのか、そういう考察、そして改善するにはどういう方法があるんだろうかということを考えてもらうこともあります。

一番大切なことは、この2の方法のところの5番、定点調査発表ということなんですけれども、私たちが地元で、私は読谷なんですけれども、読谷の小学校が5つ、そして中学校

が2つ、高校が県立の高校が1つあります。その子どもたちと、とにかく自分の一番近くのビーチの地元のビーチの調査、そして自分の足元のビーチをきれいにしていこうよということを私たちちはやっているんです。これから見ていただくCD-ROMなんですけれども、写真がいっぱい入っています。これは今、小学校、中学校、高等学校への無料配布を何とか私たちはしたいと思って、小中高の那覇と浦添と読谷の小中高の先生方と一緒に、ビーチ掃除の仲間なんですけれども、その先生方と一緒に、こういうものがあったらいよね、もしかしたらこういうもので子どもたちがいろいろなことを感じてくれたらいいなということで、今、一生懸命作っているところで、何とか、中学、高校生用のものが今年の5月くらいまでにできあがればいいなと思っているんです。

レクチャー用というのが、先生とか私たちメンバーが実際にやって、30分から40分以内くらいの、これを今、飛ばしてずっと見ていきますけれども、そういうものと、生徒たちが3時間とか4時間とかかけてじっくり見てもらったり、研究とか学習につながっていけるようなものができたらいいなと、その2種類を考えています。

内容の方は、世界に誇れる海、この沖縄の海が素晴らしい海なんですけれども、それがどのように素晴ら

しいのか、そして海浜の現状のゴミ、捨てられるゴミ、海外から流れてくるゴミ、そしてそのゴミによって被害を受ける海洋生物、それから美化と保全のためにはどういうことができるんだろうか。あと、スライドショーが2種類くらいあるんですけども、見てていきたいと思います。

海洋生物の種類と数、これがどういうふうに沖縄の海が素晴らしいかということですね。沖縄の海には、ものすごくいろいろな種類の魚、こういう説明をずっとしていくんですけれども、今日は時間がありませんので、飛ばさせていただきます。

これは珊瑚が健全でないと生きていけない。5cmくらいの本当はすごくきれいに光っている魚です。小さい魚です。

これはマンタです。

それから、ジンベイザメ、世界最大の魚類。

そしてこれはアカシュモクザメ、ハンマーヘッドなんですけれども、このハンマーヘッドが、沖縄の海は季節を選べば世界でも本当に珍しい、これは全部メスなんですけれども、こんなふうに群になって見られるとというのは、人間が飛行機や船でもつていけるようなところではなかなかないんですね。

そしてこれは、沖縄の海底鍾乳洞で見つかった、まだ名前もないカニです。沖縄は毎年何種類も甲殻類や魚類やそういうものが、新種の認定

を受けたり、新しい発見がすごくされています。

この彼の場合は、ルアーを持っていいるんです。世界で初めて発見された慶良間諸島で発見されました。そしてこの彼は釣りが好きなものですから、名前が太公望ダルマという名前が付いたんです。これも世界初の新種なんです。

そんな素晴らしい沖縄の海に、今、ゴミの現状がこういう状態です。ここは保安林区域です。私たちの暮らしや農地、海などを守る大切な働きをしています。「ゴミの投げ捨てはやめましょう」と書いてありますが、こういう状態になります。

これは日本の最も南の島の本当に美しいビーチのすぐ防風林の裏がこういう状態です。

これは海外から流れてきたものではなくて、一番西の島なんですが、この島の美しい海岸に工事用の護岸工事とはいいませんが、工事用の車輌の大型バッテリーを海岸に置いてある。あるいは一昨年の4月1日からの家電リサイクル法が施行された後は、車でいけるぎりぎりのビーチのところに、この時はクーラーが6台分捨ててありました。こういうことが非常に多くなっています。

これも産廃です。高層ビルとかホテルとか、1cm以上あるようなガラスが2トン車1台分くらい捨ててある、そういう場面もあります。そし

てきれにしてもすぐにゴミがいっぱい。掃除をして2週間後に、この状態になるんです。これが本当に困ったものです。

ところが捨てられるゴミだけではなくて、海外から流れてくるゴミの方が沖縄の場合は多いです。特に離島の宮古、石垣、与那国、それから竹富、小浜、黒島全ての島々では、本島北部もそうです。99%以上が海外から流れてくるゴミなんです。このゴミ、いったいどうしましょう。そういうことなんです。

これは宮古島です。

これは粟国の筆ん崎という所なんですけれども、この粟国の筆ん崎の海中は世界有数のダイビングポイントです。沖縄でも私はナンバーワンのダイビングポイントではないかと思うんですが、ところがこの海岸は、これは99%以上海外からのゴミなんです。医療廃棄物も海外から非常にたくさん流れています。

これも西表島です。ペットボトル類、あるいは缶類でも、バーコードを調べるとどこの国から流れて、どこの国の製品かというのが全部わかるんですね。そういうことも子どもたちに調査をしてもらったりしています。

海岸だけではありません。これは海の中です。本当に残念なことなんですけれども、沖縄の海岸の人が行ける有名な釣り場、有名じゃなくともです。釣り場の海底の100m~50m、

水深40m～50m、50m～100mの範囲の中の海底はものすごいゴミです。なぜなんでしょうか。

これは、ダイバーの方たちと海上保安庁の方たちと一緒に年に1回、1カ所か2カ所しか今日は一緒に参加してくれた消防署の方なんかも見えていますけれども、オニヒトデの退治をしたり、ゴミ掃除をしたりするんですけれども、水深が40m以上くらいのところですから、中にいる自体は30分くらいしか掃除できないんですよ。なかなか掃除すると今度は翌年行くとまた同じくらい溜まっている。

これはもしかしたら、釣り人が捨てるのか、あるいは自分の足元に忘れていくのか、それが風でながれて海中に、全ての釣り人ということではないですからね。心ない、わずかな釣りをする方たちです。これも調査をします。

これは海底なんですけれども、これは実はハワイなんですが、マウイ島のキヘイというところです。この写真をなぜ子どもたちに見てもらうかというと、この写真は海底が30cmくらいヘドロの状態になっているんです。60m道路ができて、ゴルフ場が2つできて、そしてホテルが2つできて、5万人も住むような、そこにリゾート開発ができて、このキヘイの2キロの海岸が、海底がヘドロで埋まってしまった状態になっている。沖縄にもそういうところはたく

さんあるわけです。ですからそういうことをこれからどういうふうに保全をしたり守っていったりしなければいけないんだろうか。

全般的に、先ほど先生も言われていましたけれども、事実と現実と、それを右でも左でもない、正しい、悪い、間違っている、そうではなくて、今現在の事実を理解をしてもらって、これからどうするべきなんだろうかというのをみんなで一緒に考えたいね、子どもたちともそんなふうに考えています。

海に焼き捨てられた車、これはボランティアの限界を超えていました。これを片付けるのはですね。読谷村と消防署とそれから警察と海上保安庁にお願いをして、こういうものを撤去していただきました。人間の作ったさまざまなものによって投棄したものか、あるいは海から流れたものか、そういうものによって、今、世界中の海で動物が海洋性生物が被害を受けています。

これは船舶の、たぶんヨットでしたか、そういうもののロープによってマッコウクジラがアゴにからみついて、外洋性のマッコウクジラが広い海洋に人間の作ったロープが流れているんです。

これは漁網です。

これも漁網です。

これは釣り糸とウキ、針、それからこれはプラスチックの輪っか。

これは私の住んでいるところの読

谷の自分の家の駐車場に、たまたま出てきたんですが、天然記念物のオカヤドカリなんです。オカヤドカリが大型の潜在のキャップを被っています。

これはビニール袋です。ビニール袋を海亀が非常に好んでよく食べる海亀もいるんですけども、ビニール袋が胃の中に詰まって、亀が被害に遭います。

これは4月1日の琉球新報とタイマスの方に、皆さんご存じだと思います。これも衝撃を私は受けました。産卵に本当に5m四方くらいの砂浜に産卵に来たんですけども、漂着している、これは捨てられたゴミじゃないですね。ほとんど流れてきたゴミ、この流れてきたゴミの山の中で産卵ができずに、等々身動きできなくなってしまったんですが、このまま朝になっていたら、たぶん7月の直射日光で数時間も持たないと思うんですが、たまたま写真を撮っていた方たちみんなが助けてくれたんです。本当に良かったです。

あと一つ、沖縄の海浜の現状というのは、赤土の問題というのがありますね。これも非常にものすごく難しい問題、対策も非常に難しいと思います。しかしこの現状として数時間の豪雨で、この素晴らしい礁際、礁地、イノーが赤土によって汚染される、あるいは赤土が溜まって珊瑚がどんどん死んでいってしまっているところも現実にあります。

こういう状態になっているところは宮古島の方でも火災があって、火災が低温でもってこういうゴミが燃えるとダイオキシンという、そういうものの問題、環境破壊、海水も汚染される。

ここに「ちゅら島環境美化条例」、先年の4月1日、そしてこの1月1日から全面施行されて、知事の措置命令に従わない場合は2万円以下の罰金という、ちゅら島環境美化条例というのができたわけなんです。これを子どもたちと一緒に、今、紙芝居ですかそういうものを作って小学生や中学生にもうちょっとよく理解してもらおうかなという、そんなふうにこういうものを作っています。

ここでまた一つ、私はちょっと発言させてください。この「ちゅら島環境美化条例」、昨年の7月に施行されてから私は小中高で昨年の7回か8回くらいになります。そして『ちゅら島環境美化条例』というのが沖縄のみんなが決めて、島も海も山も川もきれいにしようね、そういう条例がそういう約束ができているんだよ、みんな知っている?と聞きますと、手を挙げる子どもたちは300人のうちの3人というのが現状なんです。大人の皆さんも、そもそもわからない。

ですから、県の皆さんには「ちゅら島環境美化条例」とか、こういうことのアピールをもっともっと、学校の現場にも、こういう「ちゅら島

環境美化条例」、さまざまな「赤土防止条例」ですとか、産廃の「家電リサイクル法」ですとか、いろいろなことがありますから、そういうことも子どもたちの環境教育の中に考えていく必要があるのかなと。

先ほど申しました、これがビーチの掃除をして、読谷の場合の小学校5つ、中学校2校、高校1校が参加してくれて、4月20日に、もちろんこれは私たちだけの力ではありません。私たちは提案をしただけです。PTA連合会の方が、読谷の方では全面的に協力をし、一緒にできただけでも、強制でも何でもなく、各校の海が好きな子どもたちといつて、集まったのが1,300人集まってくれたんです。高校生が全部カウントをして。海をきれいにするには清掃、掃除をすることが大切だねと、みんな子どもたちと一緒に考えて、ゴミの調査をして、そして広報活動というのは、子どもたちと一緒にできる広報活動や、あるいはステッカーを、入口のところにもステッカーはありますので、ぜひお持ちください。そして「わした島、ちゅら島をみんなで作ろう」、このステッカーも県の方で作っていただきました。

これは県の経済同友会の方が作られたステッカーなんですけれども、私はこのステッカーを見たときにドキッとしたんですよ。「わした島ポイ捨てやめたら ちゅらさ島」本当にその通りだなと。私たちは海

が好きだから、海をきれいにステッカーを作ろう、そんなふうにやっているんです。

そして小学校や高校、あるいは図書館、それから県庁でも開催させていただきました。パネル展をして、海のことにもっと関心を持ってくださいということが、私たちの一番の願いなんです。それを子どもたちと一緒に、ビーチで一緒に清掃をしながら考える場合、それからこのレジュメの方にもありますけれども、学校で講義だけの場合、それから映像を交えた講義をする場合、そしてこの中から、今度は先生方がビーチに実際に各クラスごとにビーチの清掃を行っています。そしてどんどんあちらの方にもあるんですけども、後ろのパネルの方にもありますけれども、清掃をした後のゴミの調査のカウント、そういうものもやっております。

最後に、私が担当させていただいた小学校の1年生と5年生の感想文、それから私の環境教室を担当していただいた先生の感想文を読ませていただきます。小学校1年生です。先生との交換日記、メモ日記なんです。

「先生、あのね、今日、体育館で話を聞いたから、きょうこちゃんと、るなちゃんと私で帰り道ゴミを拾いました。そうしたらきょうこちゃんがランドセルに袋が入っていたので、それを燃えるゴミの袋にしました。燃えないゴミの袋は落ちている破け

てない袋に入れました。そうしたら両手一杯を持って、きょうこちゃんどるなちゃんと私でゴミを分けて、お家のゴミ箱に燃えるゴミ、燃えないゴミを分けて捨てました。」お母さん、毎日これをされていたら大変ですね。

それから今度は5年生の女の子です。「沖縄の海はとてもきれいです。大好きです。でも、知らないうちに自分たちで海を汚くしていることを知ってとてもショックでした。海にいる魚や動物たちの苦しんでいる姿もとても悲しいことだと思いました。子どもたちはある海のゴミ取りをして、一つの海で7,991個のゴミを拾ったことを知り、とても驚きました。一つの海でこれくらいだから、他の海も合わせるとどのくらいの数になるのかと思いました。それにゴミがたくさんあるのは海だけとは限りません。私たちが住んでいるこの沖縄を、きれいな海を大切にしていきたいと思いました。」

私たちの講演会を、これを担当していただいた先生の感想です。「今日の講演ありがとうございました。子どもたちの知識として、今日は学習できたと思います。今後は、今日得たことを元に、実際に行動に移してみることを、われわれ教師は考えていかねばならないと思いました。

子どもたちに体験させ、もっとゴミ、そして沖縄の海をもっともっと大切にしていく心を育てる必要性を

感じました。地道は活動を広げていくのも大変だと思いますが、海のこととを知っているからこそ伝えられる田中さん夫妻だと思いますので、これからもたくさんの子どもたちに伝えていってほしいです。ありがとうございました。」

という感想をいただきて、この感想が、私たちの活動のエネルギーになっております。

どうもご静聴ありがとうございました。

○ 宮良弘子（環境保全活動推進員）

皆さん、こんにちは。私は本日は、県環境保全活動推進員と、自分で言ったこともないようなタイトルの名前をいただきて、その立場でお話をしたいと思います。

いつもは、皆様ご存じかもしませんけれども、那覇市のリサイクルプラザの方でゴミ減量だとか環境活動をしていますので、実際にこの推進員として個人としての活動というのはあまり顕著にないものですから、それをどうにか拾い集めて、今日の報告をしたいと思います。

私の活動の環境啓発のモットーとしては、足元から自分のライフスタイルを見直すということと、先ほど講師の先生もおっしゃいましたけれども、私たちは被害者でもあり加害者でもある。そういうことを環境の啓発の中にも加えていきたい。それととても大きい自分のモットーなんですけれども、知識だけではなく実践を伴う環境教育、これを一つの大いな課題として自分の啓発活動としてやっています。

ちょっと具体的に、私が県環境保全活動推進員としての活動なんですが、ちょっとこれの報告をいたしますが、今年1年間何をやったかといったら、ラジオの番組に出て、自分のエコライフのお話をしたりとか。県のマイバックキャンペーンもありますので、そういう推進の話をしたりとか。廃油から石けんを作ったり

というような、よくあるような環境活動です。そういうのをやっていますが、ちょっと他の方とちょっと違うことをやったということといえば、こちらの本を持ってきてているんですが、『みみずのカーロ』という本はもうご存じの方もいると思います。あと、『60億個の缶飲料』という本が、子ども用の絵本なんですが、これを書いたドイツのフライブルグという所に住んでらっしゃる環境コーディネーターの今泉みね子さん、この方を最初、去年の今頃お呼びしたんですが、また去年の夏頃いらしたので、この方の環境のコーディネーターをして、2泊3日の間に5回の講演をしまして、宮古島に連れて行ったりとか、沖教組の研修に連れて行ったりと、こういうような個人的に環境講演会の活動もしたんですが、そこでそういうようなこととか。

ちょっと見えにくい方もいらっしゃるかと思うんですけども、ここによく知らない人はUFOの何かじゃないかとか、宇宙との交信をするのかというんですけど、これはソーラーパネルで、後でまた説明しますけれども、これはたぶん私、沖縄で始めて購入した一番最初だと思うんですけれども、自然エネルギーの推進ということで、これは個人的に買いまして、今、広めているところです。

あと、一番大きな活動としては、学校の環境教育の現場に出ていて、

ものすごく嫌われているんですけれども、学校の環境教育は、めちゃくちゃ悪口を言って帰ってくるんですけれども、こういうものも一応個人的には活動しています。

今日、本日のテーマが環境教育におけるパートナーシップということですので、この中の活動の中で、やっぱり環境教育ということの活動をテーマにして今お話ししたいと思います。

環境というのは、やっぱり早いうちから手を打たないとなかなか浸透していきません。やっぱり私たちみたいな大人になると、どうしてもしがらみがあって、こうでしょうといつても、やっぱり家ではできないとか、裏に結局、自分が生活してモノを売ったりなんかしている人にとっては、そういうことはできないよとかいわれて、大人にはなかなか言いにくいんですけども、子どもにはけっこう子どもはすぐに「ああ、そうだね」といって、すぐ聞いてくれたりとか活動してくれるということもあって、やっぱり幼いうちからの環境教育って、とっても必要だと思っていますので、このことを中心にお話ししたいと思うんですが。

先ほど、今泉みね子さんのお話をしましたけれども、今泉みね子さんが夏に2泊3日の講演会にずっと私は金魚の糞のようにくっついて行つたんですが、今泉さんから、ドイツの環境教育のことをよく聞かせてい

ただいて、ドイツではどういう環境教育をしているかということを聞いて、これもやっぱり日本は真似するのも何ですけれども、やっぱりこういうのもしっかりいいところは真似して、学校の日本の中でも取り入れていくべきだなというふうにすごく思ったんですが。

ドイツでは、一般的にドイツという言葉を使うと、どこのドイツでもやっているみたいな漢字ですけれども、一般的に言わせていただくと、ドイツでは普通の学校でゴミ減量、省エネの教育を行っている。でも、翻って、日本の学校を見ると、だいたい環境教育指定校だとか、頑張っている先生がいらっしゃるところ、それくらいなんです。頑張っている先生がいらっしゃらなくなると、全然やってないとか、生ゴミコンポストのことで何度も行った学校があるんですが、頑張っている先生がいるときは、ずっと生ゴミコンポストをやっていました。その先生がいらっしゃらなくなつたから、生ゴミコンポスターのこれが9個くらいごろごろお庭に捨てられているという学校も見たことがあります。

ですから、これが日本の現実であって、普通の生活の中で環境教育というのが普通に行われてないというのが、厳しい意見ですけれども、私がすごく実感するところあります。

ドイツでは普通の学校がゴミ減量、省エネ教育を行っていますし、小学

校入学のときにどんな文房具を購入するべきかというグリーン購入を最初に薦める。ですから、消しゴムでも、なるべく消しゴムを使わないようにするらしいんです。間違えたら横棒で引くと、そういうようなことをするんですが、もし消しゴムを買ったり、使ったとしてもダイオキシンが出ないように、塩ビで作られてないような消しゴムを買うとか、そういうような指導をまずするそうです。

省エネももちろんやっていますが、省エネでお金が、予算が浮いた分の2分の1は学校に還元される。学校が何か買いたければ、省エネを一生懸命やればインセンティブですけれども、2分の1お金が返って来るという、頑張ればおまけが付いてくる、そういうようなことがドイツではされているということです。

あと、これもドイツ製なんですが、このソーラーパネルを独自で買って、学校で省エネ教育をしたりとか、独自の予算で太陽光のパネル、そういうものを買ってやっている学校も幾つかあると、そういうのがドイツの教育だよというふうに今泉みね子さんにお聞きまして、やはり日本の学校では仕方のないことなんですが、なかなかまだそこまではいってないなというふうに実感しているところです。

それで、実際に沖縄の学校に何度か幾つかよばれて行きます。私はこ

の環境保全員になる前から学校に呼ばれて、学校でやってないことを一杯悪口を言って帰ってきて、今日もたぶんうちの息子の学校の先生がいらっしゃるのでちょっと話しづらいんですけど、ちょっとお話しします。

いろいろ学校の批判とか、めちゃくちゃ言って帰ってきて、たぶん帰った後に反省して、こんなに悪口言わなければよかったなというようなことまで言って帰ってくるんですが、とても私が感じることは、日本でも沖縄でもそうだと思うんですが、日本の環境教育は、川の下でゴミ掃除をしているようなもの、それをすごく感じます。というのは、環境教育というのはやっぱり川を例えて、川上でゴミをどんどん捨てて、川下でゴミ拾いしているみたいなものです。

ですからよく環境教育をやっていますといって、何をやっているんですかと聞いたら、校内の美化掃除ですか、空き缶集めをしていますとか、新聞を集めていますとか、リサイクルをしていますとか、そういうことで終わりなんですが、本当の環境教育というのは川上の方で、なるべくゴミ掃除しなくてもポイ捨てしないとか、ゴミを作らないとか、例えばアルミ缶なんかを集めて、アルミ缶を使うこと自体が環境破壊ですので、そういうことを集めなくともいいような環境教育、よくいうのがディープエコロジーといいますけれども、リサイクルは本当に最後

の手段ですから、ゴミ掃除も、ゴミがなければゴミなんか掃除しなくてもいいわけですから、そういうことに向けての環境教育がなかなかされてなくて、川下でも環境教育というのがとても感じています。

そういう清掃活動なんかは否定しませんけれども、もし、そういう清掃活動とか空き缶とかを集めるのであれば、じゃあたくさんの大量のゴミはどうして出たのか、私たちがポイ捨てしていたならポイ捨てをしないとか、じゃあこのゴミはどうして出たのかといったら、私たちがゴミを買っているから、そういうようなところまで、その前のことまで考えるような環境教育というのが、なかなかされていないし。

例えば先ほど、アルミ缶のことと言いましたけれども、那覇市内のPTAでもアルミ缶を集めているんですけども、どうしたらいいですかということを相談を受けたことがあるんですけど、実はアルミ缶、1個作るのにもものすごいエネルギーがかかって、外国の環境破壊をやっていりますよって、「へー、そんなの知らなかった」。じゃあそういうことを見直して、アルミ缶を買わなくてもいいような生活をしましょうというのが、そこで話し合ったことで、お母さん方が納得して帰られたんですが、そこまでの環境教育はなかなか学校ではされていなくて、やはり川下の出てしまったものをどう対処

するかということしか、まだ環境教育というか、ゴミに限ってですが、こういうことしかされてないというのが今の私の感じているところです。

実際に、そういう川下の活動であったりとか、環境教育指定校だから頑張っていますとか、頑張っている先生がいるから頑張っていますとかいう感じで、長続きなかなかしてないというのがすごく実感なんです。

あと、先ほど廣川先生もおっしゃっていましたけれども、インターネットとか知識はすごく頭にあるんだけども、実践がなかなか伴っていない。わかっているならやればいいでしょうということはいっぱいあるんですよね。何でやらないのというふうに思うんですけども、そういうことが多々いろいろな学校に行って小中学校へ行くといっぱいあるもんですから、それを目に付いたこと全て学校の中で言って帰るものですから、たぶん先生たちには、すごい嫌なおばさんだなと思われているんじゃないかなというふうに思っています。

じゃあ、どんなふうにして嫌なおばさんかと思われるような内容を言うかというと、1時間くらいお話しただくんですが、まず、ゴミの話が最初なんですが、じゃあ自分たちはどうすればいいかということをお話しするんですが、まずは実践してください。たぶん皆さん、知識はいっぱいあるから、じゃあ実践してください

さい。実践したことを今度周りに伝えてください。例えば、この『60億個の缶飲料』という、先ほど言った、今泉みね子さんのお話なんですが、このお話は本当の話なんですが、これはアルミ缶などの使い捨て容器というのは、なかなかヨーロッパの方では使わないようとしているらしいんですが、でも最近ではやっぱりこういう使い捨て文化もどんどんヨーロッパに出てきていますので、缶がすごく増えてきた。その缶を増やさないために子どもたちがなるだけ増やさないように行政とか作っている企業なんかに「アルミ缶よりも何度も使えるリターンナブルピンを増やしてください」と手紙を書いて、近くの住民の人たちに署名をもらったりとかして、このアルミ缶が環境破壊を起こしている原因ということを伝えていった、これは本当の話なんです。こういうことがヨーロッパの方では自分の意思表示をして人に伝えるということがよくされているということが書いてあるんです。

でも、日本の子どもたちというのを、私もそうですけれども、知識は知っている。どうにか実践はしています。だけども、その後、じゃあ私がやっていることをどうやったら皆さんに伝えるか、広めていくということを、なかなかやらないのは、やっぱり日本人は恥ずかしがり屋でもありますけれども、伝え方がなかなかわからぬということで、伝える

ことができないんです。

ですから学校とか地域なんかでお話しますけれども、そのときは知識は皆さん十分持っています。実践してください。実践したことを必ず他の人に伝えてください。そしたらケチャップのピンをこうやって振ったときになかなか出てこないんですが、一旦出たらドヒャーと出てくるように、誰かが変わればみんなが変わる、そういうことを伝えるために、最後は伝えてくださいというふうにお願いしています。

それで、学校の方でも、いろいろな問題をすごく私は目に付いています。学校、小学校も中学校も子どもはいますので、学校ではいろいろな社会とか理科の勉強の中で、環境問題ももちろん授業の中でもやりますし、こうしたらしい、ああしたらしいということも実際先生たちもお話ししているんですが、でも学校教育の中で、学校の生活の中でされていないんです。ですからそれを私ははっきり言わせていただいています。

それを幾つか上げますけれども、まずは学校では毎学期ティッシュの箱を持たせます。ですから一クラスに30人いれば30箱が一クラス1学期。2学期にも30個、3学期にも30個。そうするとだいたい多くて、2学期までで止まるところもありますけれども、90箱のティッシュが一クラスで1年間使われるんです。人間って、あればすぐ使うんですね。ですから

ハンカチとか、ぞうきんなんかあるのに、それを使わないで、ティッシュを全部使うんです。それはある私の子どもも担任の先生に、それを言ったときに、全然気づかなかったと。子どもたちに、「ハンカチ持っているか」と聞いたら、やっぱり持っていないと。ティッシュを使っていたと。そういうことが、やっぱり先生方は、私も先生の悪口をいっぱい言うんですけども、でも先生方って、やっぱり勉強を教えるということで、環境教育ということは学校の中ではやっていませんので、なかなか子どもたちを指導するということは大変だと思うんですけども、気づかれないということで、その気づいた先生はそれはティッシュを止めていくんです。これを言うことによって、うちのクラスは中学校も小学校もティッシュはないです。それをどんどん伝えていけば、ティッシュを使わないで、本当に必要なときだけティッシュを使うというようなことが、今、増えつつあります。

それとか、今、いろいろな学校とかのイベントとかバザーなんかに食べ物を出すときに、食器を全部使い捨てするんです。これも子どもたちの前で、「あんたたち、ゴミを減らしなさいと言いながら、いつもこんなの使っているでしょう」と言うと、何人かはうんうんとうなずいて、先生の方を見るんですけれども、そうするとやっぱり先生も気づいて、使

い捨ては止めましょうということになりましたと連絡をいただいて、そういうときは家からお皿を持ってきたりとか、あと、子どもたちに何かドンブリ物をあげるときにはお弁当箱を持ってきなさい。そういうふうな指導をするようになりましたというふうにご報告をいただいたこともあります。こういうことも私はしそっちゅう言います。

それとか、最近は、生ゴミコンポストなんかをやっているところもありますけれども、やっぱりコンポスターを使う前に、生ゴミの処理をする前に、食べ残しするのは止めましょうといいます。今、日本は自給率30%くらいしかないので、どんどん食べ残して、それで食べ残したもの、コンポスターとか堆肥工場に持っていきますというのはやっぱり本末転倒ですので、やっぱり食べ物を大切にしましょうということで、なるべくコンポスターにも入れないようにやりましょうねというふうにお話しすると、だいたい頑張ってくれる先生は頑張ってくれています。本当にそういう報告もいただいています。

ですが、なかなか変わっていかないのは、今、ゴミの問題はものすごく頑張っている学校がありますが、やはりエネルギーの問題がなかなか遅れていると思います。学校なんかへ行ったら、明るいのに電気光々です。だから電気を消してくださいと

言いますね。日本のエネルギー自給率5%くらいしかないので、電気をどんどん使っているんです。それで社会の間に「エネルギーないです」と授業でやっておきながら、電気つけっぱなしで外に出ていく、次の授業まで、そういうようなことが平氣でされています。

あと、先ほどの田中さんのお話にもありましたけれども、ビニール袋の問題もものすごく大きな問題なんですが、学芸会のときなんか、お母さんたちとか父兄の人が来ますよね、そのときに靴を入れるためにビニール袋を配るんですよね。私は毎年言っているんですけども、そのビニール袋を配る前に、父母に、「ビニール袋持ってきてください」とか「靴入れを持ってきてください」と一言言えばいいんじゃないのと、いつも言うんですけども、今年もバツでしたけれども、そういうふうにしてビニール袋の靴を渡して、終わつた後はビニール袋のゴミがいっぱいなんです。思わず私、写真を撮ってしましたけれども。

そのときの学芸会の一つの内容としては、子どもたちが未来に行くんです。ゴミがいっぱいの未来に行って、どうしてこんなにゴミがいっぱいなのかといったら、お母さんたち、お父さんたち、その子どもたちが演技しているんですが、お父さん、お母さんたちが出したゴミのせいで、今の僕たちはゴミだらけの地球に住

んでいるだよというような、そういう劇だったんです。それで、現代に戻って、じゃあ僕たちはゴミを作らない生活をしようという劇をした後です。お母さんとお父さんが、出口に帰ってビニール袋をぽんぽん捨てていくような、そういうような学芸会だったのが去年だったんです。すみません、私の子ども学校の先生がいらっしゃるんですけども。そういうようなことがあって、何度かこれを言っています。この前も中学校に行ってこの話をして、子どもたちはものすごくうなずいていました。だから子どもたちはわかっているんですけども、やっぱりそれを気づいて、先生とか親が実践すれば生活の中につながっていくんじゃないかなと思います。

あと、川の問題、先ほど田中さんも、海のお話とか自然のお話もいっぱいされていましたけれども、学校の中では、ものすごい合成洗剤を使われていますね。そういうことも私は新聞にも書いたりとか、子どもの前でも言っているんですけども、なかなか合成洗剤を使うのを止めるとかというのは、なかなかなくならない。ショッピングトイレを見て、今日も合成洗剤があるわという感じで、がっくりするときがあるんですが、こういうことも私は嫌われながらもチクチク言っていて、これを気づいた先生方や父母の方、また子どもが一言言ったことによって変わる、

学校の中が変わることで、私は嫌われ者でもいいですので、言い続けていきたいと思っています。

時間がもうないので簡単にお話ししますが、今日は環境教育のパートナーシップとしてのお話でしたが、これからも私は会のグループの中のスタッフでもありますが、個人としては学校とか行政と仲良くパートナーシップを取って、先生方も、やはりいろいろな科目を教えることでとても大変だと思います。私もいっぱい批判しますけれども、それを先生のせいにするのではなくて、私たちが地元の住民とか母親の立場として、できることは協力していきたいと思っています。

欧米の方では環境のN G Oがどんどん学校に入って、先生方ができないことをフォローして、環境教育をやっていると聞いています。ですから私たちも、私も含めて、環境教育に携わる者が、どんどん学校現場とか地域に入っていって、啓発、お手伝いをしていきたいと思っています。

最後に、本当にお話したかったんですけど、ソーラークッキングですね、これは後でちょっと見ていただきたいですが、なかなか今、エネルギーの教育というのがまだされていませんので、日本もエネルギー自給率、先ほど言ったように5%前後しかありません。そういうことももつと学校の方に伝えて行きたいし、実際に私、これを何で買ったかといっ

たら、インドの友人がいまして、インドの方ではやっぱり化石燃料を使わないように農村地帯なんか、やっぱり電気なんか通じないところは、貧しい村ではこうやってソーラークッキングで調理をしています。アフリカなんかでも、2ドルくらいでできるような小さなソーラークッカーを各家庭にN G Oが配って、調理ができるように啓発をしています。それを私はインドの友人から初めてソーラークッカーを知って、私たちも、残り少ない石油、化石燃料を湯水の用に使うのではなくて、こういうものをを利用して、そして省エネをしながら地球環境を持たせていきたいということを、これからゴミ減量だけではなくて、エネルギー教育にも伝えたいという意味で、今日これを持ってきました。もし後で興味がある方がいらしたら見ていただきたいと思います。

ちょっと長くなりましたが、どうもご静聴ありがとうございました。

質 疑 応 答

○ 田中幸雄（N P O 法人 沖縄海
と渚保全会 理事長）

すみません、質問が全然ないので、
ちょっと私、先ほどのところで話し
忘れたことがありますので。この一
言だけちょっと言わせてください。

皆さん、小中高校、大学、専門学
校が、沖縄県内の536校なる、そ
ういう子どもたちが、県の呼びかけと
市町村の呼びかけと、そして子供会
や、そういう地域の呼びかけによっ
て子どもたちが、どのくらい清掃を
年間についていると思いますか。一昨
年840回なんです。それが海と川だ
けですよ。町も公園も山も回数に入
ってないんです。これはなぜかとい
うと、県の漁業担当の方が調査をし
ているから。昨年は1,000回を越え
ています。海と川以外で、公園も道
路も山も、学級単位で掃除をしてい
る、あるいは学年単位で、P T A の
行事で掃除をしている、そういう回
数を数えたら、私は2,000回は十分
いっているのではないかと思うんで
すよ。毎週毎週掃除のボランティア
で、みんなが頑張っている、子ども
たちが頑張っている、そういう記事
も今年はすごくたくさん出ました。

人口比率からいいたら、私は沖縄
は日本一だと思っています。そのこ
とを最後に、私はどうしても皆さん
に、先ほどお話をすることを忘れまし
たのでお伝えしたいと思います。あ

りがとうございました。

フリートーキング



○ 谷口文章（甲南大学文学部教授）

それでは、時間がございませんので、むしろ私をというよりも、本当は先ほどのそれぞれの方々にお話を、私の方からお伺いしたいというようなものがございまして、私の方は言葉足らずのところは2、3補いさせていただきたいんですけれども、まず、全般的に、環境問題をやる場合に、非常に情熱が必要です。宮良さんのような情熱が必要です。それは他方で焦ってはならないというふうなところもあると思うんです。

それに関しては、私も研究者の立場から、環境教育学会は14年ほどいろいろ関わってきましたんすけれども、学校教育の先生が別に、今、学校教育を弁護しようとも思いません。宮良さんが言われたことが、まさに当たっていると思うんですけども、かといって何もしないかというふうなことになると、実はこ

れは全国的に実際に環境教育をやる場合に、なかなか普及しないというふうな問題がありますので、そのへんのことを合わせて後ほど申し上げたいなというふうに思います。

どうしてもパートナーシップを組む場合は、お話し合いの上で、どのようにコミュニケーションを作っていくかということだと思いますので、そのへんのところで、今日、私の立場がフリートーキングということで私に集中していただくよりも、むしろ、4人のそれぞれこの地域で頑張っておられる方が、やはりお互い、また、今日参加された方々とも結びつくような方向でやっていただきたいというふうに思っております。

順番に、それと、私がちょっとだけ、まだ言い足りなかったことから先に申し上げて、それからむしろパネルディスカッションふうでお話をと思っております。

まず、普段、もう少しテーマによりましては、心の環境ということについてお話し申し上げます。公害問題も含めて、実は日本で一番最初に環境教育を取り上げたのは公害教育であったわけです。そういう意味では、社会環境の破壊ということから起きてきたであろう、みんなの環境教育の意識が社会環境の破壊、たぶん皆さんに、時間がありませんので、環境問題って何ですかというと、たぶん森林伐採とか、水の汚染とか、オゾンホールとか、砂漠化という答えが多くの場合返ってくると思います。それは皆さんの認識は自然環境の問題というふうに認識されていると思うんですよ。ところが、日本ではやはり社会環境の破壊ということから、われわれが環境教育とか学校教育の中に入り込んできたという事実を忘れてはならないだろうと思います。

それと、学会が創設されたときから私は言っておりましたのは、心の環境が問題ではないでしょうか。ですから、先ほどの自閉的であると同時に、同じ事柄が潔癖性であるということ。ですから、土に触れること自体も嫌がる若者たちがいるということです。あるいはどなたかの中にありましたように、汚いものには蓋をするというような傾向があるということを、まず抑えておかなければいけないと思います。

まとめますと、われわれの内なる

心の環境の汚染が、外の自然環境や社会環境を破壊したと思います。言葉の上で、ライフスタイルを変えるということ、実は心の環境の浄化だと思っております。ですから、価値の多様性というふうに言うけれども、それをもう少し具体的に言うと、立っている観点を変えることだと思います。立っている観点が、今日は相手の立場になると言ったんすけれども、いわゆる動物の立場であっても植物の立場であっても、それは観点を変えることになります。これが多様価値をつくりだしているし、多様価値を認めていることになるかと思います。

そういうところを、まずおさえておく必要があると思う。

環境教育が心豊かな子どもを育てると同時に、環境問題に自ら対処を、自主的に主体的に対処できる子を育てると申しましたけれども、もう一步具体的に言いますと、いろいろなケースが出てきて、いろいろな問題がある場合に、人から教えられるのではなくて、自分から問題解決する能力を養っていくことだと思うんです。そこで多様な価値観を持っていたならば、いろんな問題点が出てきたときに、自分自身がどういうような価値が大事かということを、その都度選択していく、主体的に選択していく、問題解決をするという子を育てていくことだろうと思います。これは教育一般に通ずることに

もなるかと思いますが、環境教育というところに限定する場合、そういうことになると思います。

それから、インターネットのことを見つと強調しましたけれども、私は最初から終わりまで10年以上前からファミコンが出てきたときから、18歳未満は使わせてはいけないということを公的な場で言っておりました。いわゆる成人映画が18歳未満人々の問題だった、これは発達年齢が違うですから、見ていい子もいれば、見て悪い子もいるでしょう。だけれども、やはり18歳まで自ら考える力を培うときに、インターネットよりももっと前、ファミコンですね、ファミコンでもって二進数的な考え方、気にくわないものは消してしまう。タマゴッチが代表だったでしょう、全世界に広まっていきました。けど日本人は残酷だと言う評判がある結果得たんですよね。なぜならば、自分が思うようにタマゴッちで育たなかった鶏は消して殺したら終わりだからです。それが非常に日本人の残酷性やゆとりのなさ、相手の立場に立たないところだろう。そう思います。

そういうところからいくと、インターネットやコンピューターも踏まえて、二進数的な0か1か、全てができるか、できないかという発想、そのものが大きな問題であって、基礎学力の低下というようなところは、実はそこに通じていくものがあるわ

けです。想像力のなさということになってくるわけです。

だから、やはりある程度自分の考えが持てるようになってこそコンピューターなどを使うべきだということですので、これは手段なんです。決して忘れてはならないことだと思っております。

それから総合的学習の時間についても触れられましたけれども、廣川先生、総合的学習の時間というので、ひとつはコンピューター、情報教育はこれはコンピューター教育ですね。国際理解というのは、これは英会話教育なんですよね。それに対して、今のところ、マイナーになっているのかな、その傾向があるのは、むしろ環境教育、一番最初は環境教育だったはずなんですね。ここ1年の間にかなり後退しております。それから福祉・健康、ということが4つ目に行われていますね。総合的学習の時間、その4つのテーマがある。ところがよく考えてくださいね。実はその他の時間、基礎学力緒時間を削ってやらなければならない、本当にコンピューター教育でしょうか。情報教育でしょうか。これは手段にすぎないんですね。子どもができあがったとき、物事が考えられるようになったときに初めて使いこなすものであって、手段なんです。英会話、国際理解というが、英会話なんですね。英会話も手段ですよ。自分の思い、自分の考え、自分の思想を相手

に伝える手段にすぎないわけでしょ
う。

それに対して環境と命、健康を含
めて、ボランティアを含めて環境と
命は、実は人間の目的なんですよ。
だからそのへんのところが実は本末
転倒しつつあるので、各学校、教育
の先生方は、そこをきちっとやって
ほしいなというふうに、一方で希望
としてあります。

例を挙げましょう。環境というふ
うなことでもって第一に総合的学習
を組んだときに、コンピューターを
使ったら手段的であったとしても、
これは有効です。子どもたち、中学生
であっても英語をやります。非常
に自由にやります。われわれが思う
以上に。英語を使いますよね。そう
すると環境を使いながら、また命の
問題を取り扱いながら、目的を実現
して、他方でコンピューターと英語
をやろうと思ったらできるわけです。
それは問題の設定如何だと思うんで
す。総合的学習の時間の場合です。
それは一つの例です。

それからもう一つ思うんですけれ
ども、環境教育というのは、先ほど
環境問題教育ではないということを
申し上げました。あるいは環境教育
などを論じるときに、環境問題をた
だちに論じるのではなくて、ビデオ
をお見せしたのは中頃以降だったと
思います。

むしろ自然と環境、自然の生態系
の環境、健全な環境、人間と健全な

環境の関わり合い、命と健全な環境
との関わり合い、従来の科目だった
生物学がそうだったと思うんです。
そういう基本の基本をまずおさえて
から、あと、環境の汚染、破壊に関
して問題にする。逆だとダメだと思
うんです。環境問題から環境を見る
のではないと思うんです。健全な命
の循環も含めた形の循環、3つの循
環を申し上げましたけれども、それ
をおさえた上で環境問題、どこが循
環していないかをおさえるという、
そういう手法を取らなかつたらいけ
ないと思いますので、よく議論する
場合ごちゃ混ぜになっている場合が
ありますのでまずちゃんとした生命
循環とか生物循環とか水循環とか大
気循環をおさえた上で循環していな
いところが何なのかということを考
えなければならないだろうというふ
うに思います。

それでは、ちょっとだけ、私はイ
ンターネット欠席を薦めたわけでは
なくて、大学生がいろいろなところ
でパートナーシップを、海外で結ぶ
場合はしやすいということですので、
そのへん、くれぐれも誤解のないよ
うにしていただきたいと思います。

順番に、儀武さん、非常に立派だ
なと思って、地域の環境の方で頑張
っておられます。そこでちょっとだけ、
下手すると、これは行政の高く
なればなるほどです。都道府県、国
も含めて、一生懸命やっているとい
うことをいった場合に、一般に聞く

場合に、トップダウンでやりなさいといわれているように聞いてしまうときがあるんです。今日、一生懸命企業で頑張っておられるから、この事実報告はものすごく大事だったと思うんですよ。だからこそ、今度、消費者という立場になります。消費者がそこで協力していくことだとだと思うんです。今日はそこまで非常によくわかりました。

だけど、私は、これを企業と消費者のパートナーシップとしての地域の人たちの輪の広がりのことだと思うんです。そういうふうに、もしも考えるならば、それは消費者、それから企業の方というのは、完全に円満に手を結んでいると思うんですけども、下手すると買い物バックを持ってこなかったから、これは悪いなという負い目をやりながら買いに行かなければいけないということになりますね、消費者が。もちろんできるだけそうありたいと思うんです、みんな。だけども、やはり全て完璧にやると、ものすごくしんどいと思うんです。そういう意味で、環境問題というのか、環境教育は焦ってはならないというのがあって、構えだけ、10の思いのうち1つができる、実現できたら、ひょっとして次は2になって、3になって、10になるだろうと思うんです。

それと、あと、とらえ方の問題としては、企業と消費者でそれぞれ一端を分けながらも、地域のパートナ

ーシップというふうに組み込んでしまうと、もっともっと消費者の人たちも協力がしやすいのではないかという印象がありました。

それとともに、できれば今度は学校の地域の方まで消費者の企業の立場から広げていっていただいたら連携が取れるのではないかという、そんな感じがいたしました。

それから、広川先生の方で、ものすごく大事なことをポンポンと軽く指摘されておられましたので、本当は時間があればもっとお聞きしたかったんですけども、インターネットでよく知っている、今日、2、3の方々、同じことだと思います。高野孝子さんといって北極へ行った人ですかね、冒険家の女性の方がおられましたけれども、その方がインターネットでリアルタイムで知らせてくるんです。子どもたちが学校で、それを受けるわけです。それで北極の方の状況がわかったというんだけど、それは大嘘だと思うんです。高野孝子さんはよくわかったと思うんですよ。だけども子どもたちが、そこで満足するようなインターネットは止めた方がいいと思う。あくまでも手段としての情報を得るためにあって、それがきっかけで自分たちも、そういうふうに身体を動かすということになっていくのではないかと思いますね。

もう一度、インターネットは、私は基本的には賛成ではありません。

ただ、道具として有効に使えるようになったときには、やはりこれは使うべきだと思っております。

結局、野鳥を通して何が見えるか、大事だといわれたのは全くそのとおりでして、今日センス・オブ・ワンダーというふうに言いましたけれども、見えていても見えないんですね、われわれ知識が過剰になっております。聞こえていても聞こえないんですよ。ですから、センス・オブ・ワンダーをちょっと延長していいますと、やはり心の目で見、心の耳で聞かなかつたら、見えもしなければ聞こえもしないんです。ですからそういうところが教育の根本ではないかというふうに思います。

それから、側にいる人が共感する必要があるということをいっておられましたが、レーチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』の中に4歳の甥御を連れてよく森林の中とか浜辺を歩いたりします。彼女が素晴らしいのは、あるいはびっくりしたのは、ロジャーという甥御なんですが、4歳の子、何も名前なんか教えなかつたんだけれども、ある時スライドを撮ってきてそれを見せたら、「ああ、これはレーチェルが好きな植物だね。これは人間が採つたらあかんのやで、なぜならリスのために食べ物を残しておかなかんのやね」と、1回もそんな説明したことないんですよ、レーチェルがその植物が好きだということも。だけ

どもそれを側にいて全部聞いているんですね。それから浜辺の波の繰り返しの音、そのときにレーチェルが一緒に感動するんですよ。それが実は教育でして、指示すること、何々させるというのが教育ではないと思うんです。

その当事者は子どもと共に共感するか、いかに共感するかということ、そして共感する必要が実はしてくれる、わかってくれる大人、先生が必要なんです。家庭教育が一番問題でしょう。わかってくれる母親が、若い母親がいないというのが一番問題だと思うんです。忙しいから。本当は環境教育は家庭教育から、あいさつからはじまるわけですから、忙しいから、ときには自分の時間がなくなるから。あるいは下手すると体系が崩れるから一人だけでいい。フェミニズムになると生む権利、生まれない権利という話になってきます。全然議論が違うと思うんです。

女性の素晴らしいのは次の新たな世代を受け継いでいく役目、大切な役割があるわけですから、そのところの母性というふうなもの、これをむりやりに知識でおさえてはならないだろう、そう思います。変な平等というふうなこと、権利主義というのはおかしい。そのように思います。という意味で、まず環境教育は家庭教育から出発していく必要があります。

それから広川先生、「僕がやった

のではない」というふうに言うのは、ものすごく筋が通るんですよ。今の若い子、学生と話をしていてものすごく理屈が帰ってきて筋が通るんです。そのくせ、自分の世界に入つてはいけないでしょう。後ろがうるさかったら「前にいらっしゃい」と言ったら、ブスッとすねますよ、男の子が。まずそこへ、自分の中が犯されてしまうわけですね。だから帽子を被って入ってくる。「帽子を取りなさい」と言ったら、彼だけではなくて全クラス100人、200人が1年間うつとうしいです。反抗しますよ。最初はわからなかった。だから私、懇切丁寧に、約束したら彼らはきっと守ります。「帽子って何のためにあるのや」と聞くんですよ。1時間目一番最初のときに。みんな「太陽をさえぎるために」と言うから、「そうやな、ここはどこや」「教室」「太陽てっているかい」と言ったら「照っていません」「取りなさい」ここまで説明して儀式やるんです。彼に言って納得したら、周りもみんな納得している。だから理屈はものすごく通る。だから知識過剰はそこなんですね。お母さんが「何でそんなことしたの」と言う、われわれの年代のときにはどんなに言おうが、お父さんが言っても、腹が立って仕方がない、理屈が通らないわけ。辛抱できたわけでしょう。

今の子はお母さんが丁寧に聞き過ぎるから、嘘であってもかまわない

から答えてやっと納得してもらったというところで、本音の自分と表面的な自分が分離するんです。だから神経症的な子どもが増えているんです。教師が子どもに対して話をするときにどれほど気を遣ってものを言っているか、大学生でもしかり、小学校、中学校、まだ小学校は元気だけど、私は一番好きなのは小学校の子の前で話すことですよ。それが中学校、高校、大学になるとあまりよくないね。一々気を遣いながら、やってから言わないといけないわけですから、そのじやまくさみたいなものがある。

同時に、これは学校の先生がおられましたら、ちょっと耳が痛いですけれども、絶対に子どもを持ち上げある必要はないと思う。それは全部の先生方がそうしていただきたいんですね。一人だけだったら、またそっちの方で学級崩壊という方向へ行きますから。それが実は多いに問題ではあるけれども、やはり叱るべきことは叱ること。

それから、若いお母さんおられると思いますので、個室は中学校まで与えないこと。小学校、中学校のときはお父さんがいて、お母さんがいて、チャンネルはお父さんが取っていたらいいんです。不条理ですよ、ものすごく腹が立つんですよ。その数年間の我慢が担任に対する我慢が当たり前になって来ますから。それを小学校、幼稚園のときから個室を

与えてしまうと勉強しているように思ひこんでいるのは親の希望ですよ。だって、自分がそのときそんなことしたかというと、してなかつたんですから。まるでやつていたように思ひこんでしまう。母親も父親も。そんなの与える必要はない。不条理が堪えてあたりまえ。だって、何で生まれてきて何で死んでいく、そんなのわかりませんよ、人間。

ただ言えることは、生きている限りは誠心誠意だと思いますから、根本のところを問われてもわからない。わからないところに開き直つてより良いものにしていくというのが人間じやないかと思っております。

そういうところからいくと、やはり多少大部屋で、やはり中学校3年生くらいまでは堪えるというのは当たり前ではないかと思いますが、そのあたりまえができない点が家庭教育、学校教育がうまくいかない、そういうふうな基本になつてしまつているような感じがいたしますので、そのへんのところ付け加えておきたいと思います。話をしたらものすごくかわいいんですよ。いい子ですよ、素直ですよ、大学生や高校生です。

ある女の子に聞いた。前に電車がいっぱい混んで、自分が座つていて、目の前におじいちゃんがいた。席を譲ろうかな、どうしようかなと思つてだいぶ考えたわけです。結局ずっとやって、譲らないままできた。「何で譲らなかつたの」と言つたら、

「おじいさんに対して優しい思いだつたから」と。わかりますか、われわれだとそこで迷うことなくすぐ席を替わりますよ。ところが今、席を立つて、その前のおじいちゃんに会つたら、自分のおじいちゃんと比べて年寄り扱いしたと思って怒るだろうから、怒らないように優しく座つたままだった。どこかねじれてませんか。これがいわゆる教育現場であり、学校の現場であるということも知っておいていただきたいですね。

ですからこれを全て臨床カウンセリング的な形だと親の責任にします。それは行き過ぎだと思う。他方で、今度学校教育の方に関しても、学校の先生が全て責任、それも行き過ぎだと思うんですよ。それぞれの立場をきちつとおさえておかなければ日本って崩壊するんじゃないかなと思いますね。中国なんかの若者と話したら、「自分たちがやって行かなければいけない」と言うわけでしょう。

中学2年生の男の子がいた。そのときに昆虫の標本を作つていた。一生懸命やって、賞をもらったわけ、環境局の賞をもらった。校長先生がいて、私はニコニコ聞いていて、ちょっとだけ皮肉った。「いや、日本では昆虫採集やつたらあかんのよ」と言つたら、もう顔がカッとなつて、10分間喋りに喋りましたよ。日本の若い子たちが中学生、大学生であつても、高校生でも、それだけ自分の

意見言えますか。10分間、顔がカッとなって、しかも一番大事な校長先生の前で、それを言わされたから、もう言い抜かなかつたらいかんわけ。途中でニコニコとして、「いや、君のやっていることは大切な事なんや、そういう調査をやらへんから日本の子どもたちは、今、昆虫採集すらできへん、ようやったね」と初めてニコニコとしました。だからそれくらい主張するんです。個々の人が。中国が全部いいとは思わないですよ。そういうところの自分たちがやらなければいけない、それがやはり日本の、これは甲南大学の学生だけではない、国立大学の学生なんかの場合も、ちょっとおかしいのではないかというものが起こってきてているような感じがいたします。

それから、広川先生が言われる、ローカルに行動し、ローカルに考える、私は当然のことであって、今日はたまたまグローバルな事をご紹介しただけですので、ローカルに、やはり行動しながら、ローカルに今度は考えるというのは何かというと、例えばこういうことです。環境教育をやりますと、今から雨が降るか、降らないかで畑に連れて行っているんです。私、学生なんかも。有機農業の野菜とか米作りをやっております。そのときの判断、そのところは臨機応変にやらざるを得ないわけです。それがその臨機応変な問題が起こったときに対処する能力になっ

て行くわけでしょう。だからマニュアルなんかないんです。したがって、ローカルに行動し、ローカルに考える上で、知識ではなくて知恵を獲得するんです。そういうことは必要ではないかと私は思っております。

それから、田中さん、実は私も今さっきの写真、スライドを見せていただきながらワクワクして、もうちょっと話をしたいなというふうに教えていただきたいなと思っておりましたけれども、それはともかく、動物が好きなものですから、田中さんもたくさんのことと言つていただきましたので、むしろこういう教育がどうなんでしょうか、美化条例を知らないと言っておられたけれども、環境教育、そのものはどうなんですか、沖縄では。

○ 田中幸雄（N P O 法人 沖縄海と渚保全会 理事長）

私は海の事だけですので、実は今作っている C D – R O M の方が、教科書の中に海の環境の事に関する記述というのがほとんどないということだそうです。

○ 谷口文章（甲南大学文学部教授）

先ほどちょっと言いましたように、あまり豊かであるならば、自分で豊かであることに気づかない。それが壊されてきて初めてこれは大切だということ、今、ぎりぎりの状態だと思うですね。今だったら間に合う、今だったら、だから私は子どもの心も信じているんですよ。若者の心も

信じているんですよ。そして生態系の力も信じているんですね。

神戸の大震災、あれはもう人間がうねぼれたと思っております。甲南大学の校舎半分潰れましたから、19人も亡くなりましたから。そこでこそ、もう1回原点ゼロに戻っていく。ところが神戸市なんかの場合だったら何とかなるよといつて、電気をよけいに付けていますよね、ルミナリエ、私、行きもしないし、腹が立つてしようがないんですね。震災記念は、ライフラインを1日、2日止めることだと思うの。お金なんかいらない、エネルギーなんか使う必要はないのです。全部水道とか、ガスとか、そのへんの電気をストップしたらしい。あの時代の事、あのときの事、数年前でしよう。それを思い出すのが、実は震災記念日だと思っております。神戸市全体で、できないならば各学校でやったらしいと思っている。大きな事をやらなくていいんです。環境教育は。足元の事だけをきちっとやるかどうかだと思っています。

田中さんの場合に、海外からのゴミが多い、これは先ほどちょっと日本海をビオトープにしてみたいなことをいいましたけれども、ゆくゆくはちょっとまたご相談でいろいろと私もまた調査など参加させていただきたいと思っておりますので。

それから宮良さん、非常に情熱的に、私も、ものすごくよくわかるん

ですが、これは文部科学省が悪いといつたらいけませんので、今のは独り言です。

要するに、教育制度そのものが実は日本の代々伝統です。第二次世界大戦へも駆り立てた、そういうふうな教育制度そのものが実は問題だらうというふうに思う。あるいは日本人の集団の作り方の問題だらうと思うんです。ですから、それがトップダウンのときは非常によく言うことを聞くわけですけれども、残念ながら指定校であるとか研究開発校で指定されていても、常にそういう所へ講演に行ったときに3年で止めないでくださいね、体制化してくださいねというふうにいいます。だから学校の制度の中に入れてくださいね、カリキュラムの中に入れてくださいねというふうにいいます。これがないとダメなんだけれども、校長先生、ひょっとしておられるかわかりませんけれども、熱心な校長先生がおられるところはうまくいっています。それから熱心な先生がおられるときには、おられる限りうまくいって、転勤ですぐダメになります。

これをやはりみんなが何とかしないといけないと思うんですけれども、これはPTAの力もやはり学校教育の中に入れて、ものすごく大きいと思うんですよ。学校の先生方を支えていただかなかつたらいけない、そういうふうに思います。特に教育組織は非常にやっかいですので、ある

意味で、うちの子は何でこんなので怒られるんですかと、そんなうるさではなくて、教育そのものについては、ある程度コミットしていただいた方がいいのではないかなどというふうに思いますね。

それから、行政の方もやはり、私、思うんですけれども、ものすごく一生懸命やっておられるんです。これは市町村においても都道府県においても、それから国においても。最初に言いましたように見方、観点が違うということですので、その先生の立場というふうなところ、あるいは行政の立場の中においての可能なところと、こちらが伸び上がってドッキングできるところのスタンダードを見極めていただきたいと思うんです。

そこをやらなかったら、一方で要求水準ばかりだったら必ずギャップがあいてきますので、今、お互いにギャップが小さくなるように努力すること。合致するところまでいきなりは行きませんから、そういうふうなものが実はパートナーシップの構築であろうと、構築への努力であろうと、そのように思います。

ティッシュペーパーのお話とか、宮良さんのお話、コンポストのこと、使い捨てのことというふうなことも、全てよくよくわかりますけれども、それぞれの立場とか、一つの流れがあるというふうなこともあるのかもわかりませんが、ちょっとだけ、燃

え尽き症候群にならないようにしてくださいね、宮良さん。

あまり情熱的で、ゆっくり行って、確実にやっていただいて、ものすごく視線がいいし、それはなぜかといいますと、一つだけ、確かに日本に比べてドイツの方が素晴らしい。それからインドの方でもこういうことをやっているということですけれども、確かにそうです。ところが逆に日本でもこういうことをやっていると行って、発達途上国の方で紹介されている場合もあるんです。それはどういうことかというと、文脈が違うからいいところだけ持ってきて日本にいきなりは馴染まないということなんです。ですから、この背景が違うので、部分的にいいなというふうに思っても、日本ではなかなか日本の文化とか組織に合わないというのがありますので、細く、長くやる努力が必要だというのは、そういう意味なんですね。

○ 田中幸雄（NPO法人 沖縄海と渚保全会 理事長）

実は沖縄の海岸には、中国語と台湾語の、台湾、中国から流れてくるペットボトル類ですか、そういうゴミがものすごく多いわけなんです。その原因をいろいろ考えてみると、中国本土の河川から流れている可能性があるのではないか。河川から川へ流れて、そして海流に乗って沖縄に着くと、そこでもう一方考えてみると、中国がペットボトル、ビニ

ール類、そういうものを生産するようになったのはわずか20数年前です。その生産の工場を日本の企業が行って、欧米の企業が行って、中国に工場を造って、製品を一生懸命作ってもらって、それを逆輸入をして、今度は中国人たちが実際に自分たちで使うものを製品として作るようになって、リサイクルの問題ですとか処理の問題ですとか、そういうことを全く日本の企業と欧米の企業は、そういうことを一切考えないで、ただただ工場建設とか、そういうものをやっていった現状なんでしょうか、そのへんをちょっとお伺いしたい。

○ 谷口文章（甲南大学文学部教授）

これは人間の本質的な事柄です。人間のエゴイズム、エゴの病だろうと思います。一般的に分析すること、ただ1回だけそれは言って押させておかなければいけないと思うんですけれども、やはり自分がかわいいということなんです。だからそれは個人の自分、それから家庭のエゴ、自分の子どもだけをいい学校、いい会社、地域のエゴ、例えばゴミは処理場を作らなければいけないといいながら、隣に来たら反対ですよ。総論賛成、各論反対、これが地域のエゴ、企業のエゴ、国のエゴというものがありますから、そのエゴを外すことが区切りを動かすことだというお話に今日はなっているつもりです。

一番やっかいなエゴは、もちろん個人のエゴと同時今度企業のエゴだ

と思います。企業モラルの問題、企業倫理の問題というところまでいかなければいけないわけですが、多少良心的な、やはり会社も頑張っておられますので、多くの場合は、環境何とか室というのを作って、いわゆる世間的なポーズの場合もまあありますけれども、作っておけば進みますから、作らないのとは違いますので、それはやはりわれわれ市民の声を上げていって、非常に積極的にやってくれておられる企業もありますし、生協なんかはわりあいそういうふうな形で動きやすいタイプだらうと、団体としてはですよ、全てがそうだとは思いませんけれども、それはやはり消費者なり市民が一つひとつ声を上げていかなければならない、日本人は声を上げるのが格好悪いと思いますから、そのへんのところはちょっと、堂々と言うべきではないかと思っております。

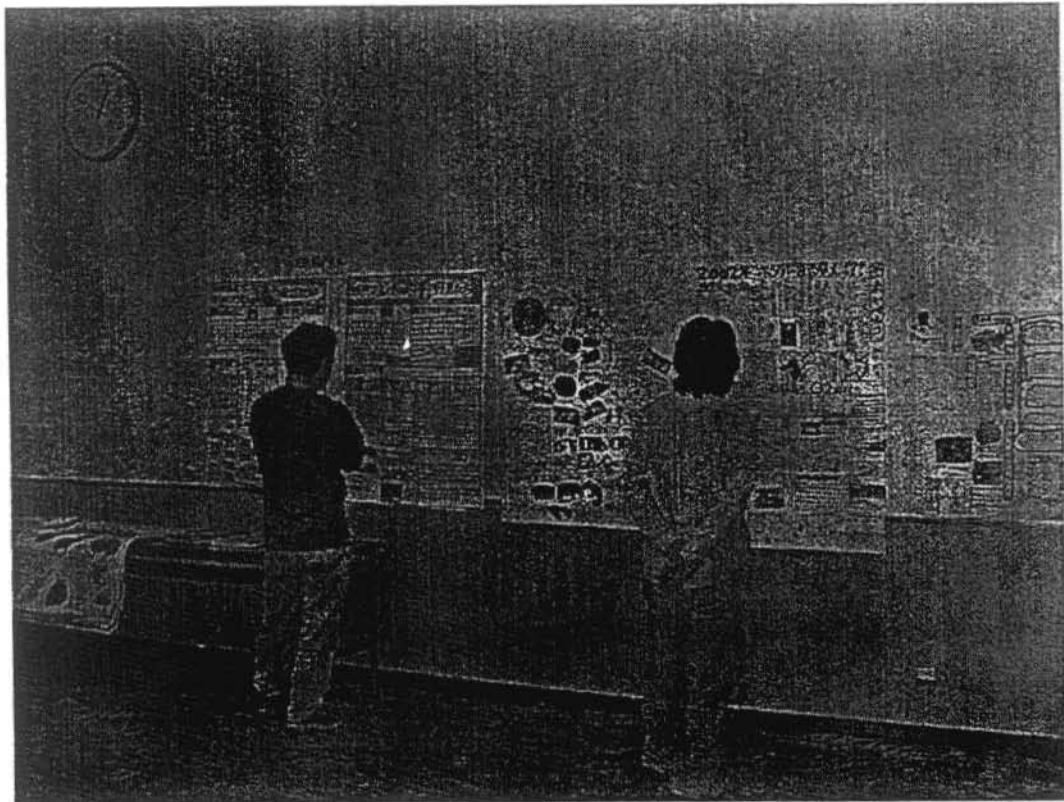
今日は本当に熱心にいろいろと、私としまして、今日のパネリストの4人々、あるいは皆様方、もし用事がある場合は環境政策課の方に連絡いただきましたらと思います。

普段、やはり人間の欲望というのは自分の欲望で留めるべきだと思っております。だから自己保存までだと思っておりまして、それが対社会に出るとどんどんと累積していくて大きなエゴになっていきますので、基本的には歩く速さで生活をするというのが欲望のメジャーではないか。

なかなかできません。私もなかなかできませんが、歩く速さで生活する。それから4部屋あった場合、4つ電気をつける、これを半分にしなさいといったらしんどいんですよ。だから環境問題から離れていくんです。4部屋を1部屋だけ消してご覧といって、何とか大丈夫なんです。4部屋を半分にすると非常に辛いです。人間慣れた場合。4分の1減らす。

次、3部屋を、今度3分の1だとしんどいんです、やっぱり。3部屋を同じトーンで4分の1だけ節約するという形でだんだんと1に近づけるというのが、私たちが環境というふうなものをこれから長く保全していく基準ではないかなというふうに思っております。

非常に長くなって申し訳ございません。ありがとうございました。



会場内に展示された壁新聞など

講 演

パートナーシップによる環境教育の推進 —地球環境問題の現状と環境教育の展開—

谷 口 文 章

甲南大学 教授（哲学/環境学）

1. はじめに

●21世紀は環境の世紀か：21世紀の時代精神は「生命と環境」

-----何のための環境か、それは人間のみならずすべての「生命」にとっての「環境」

①「環境」は「生命」を生み出す：環境と生命は表裏一体

【レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』、新潮社】

-----環境はネガフィルム・生命はポジプリント、実は両者は同じ物の別面である

②自然環境における野生生物の生命活動：素晴らしさとともに、厳しさも体験

-----弱肉強食も現実。自然の厳しさ

【若本俊雄写真集『白鳥—生命の讃歌』、芸草堂】

③パートナーシップによる環境教育

i) 環境省の政策における「パートナーシップ（協働）」の位置づけ：環境基本計画推進調査「パートナーシップによる環境教育・環境学習の推進」

ii) 地域環境におけるパートナーシップ：神戸市建設局東部建設事務所・水環境センター「ビオトープ」

iii) 国際環境のパートナーシップ：国際会議・UNESCO訪問等（1996・1998・1999・2000・2002年）

2. 「生命（いのち）」の教育

①生命の誕生（人間の場合）

【L. ニルソン他『生まれる—胎児成長の記録—』（講談社）、T・ベリイマン『誕生の詩』（偕成社）】

「個体発生は系統発生を繰り返す」（ヘッケル）：生命時間の圧縮（40億年の生命の歴史を母胎の10ヶ月間で体験）

-----すべての生命と人間はつながっており、他の種を滅ぼすことは人間を滅ぼすことにつながる

②生命の教育は死の教育でもある：生は死によって成立

ex. 死なないガン細胞は生命体を滅ぼす（古い細胞が死ぬことで新しい細胞が生きる）

ex. 生命誕生の喜びと死の悲しみを体験（情操教育の基盤）

-----動物の生と死の瞬間も共にする教育

③生命の把握：科学的・体験的

客観的な科学教育とともに、動植物を理解するために主観的な創造の世界を、擬人化による感情移入で理解。

共感的理による原体験と体験的実感

④生命倫理 bioethics の考え方

個体・遺伝子の同一性の確保：バイオ植物や治療・臓器移植 等の問題

-----環境教育は自然環境の中で生命個体の尊重と共生を学ぶことが基本

3. 「環境」の教育

①環境問題：水俣病・奇形ザル・環境ホルモン (VTR)

②環境世界の生成：生命空間の圧縮

「万物は流転する」(ヘラクレイトス)：渦運動による自己生成と散逸構造 (プリゴジン)

-----世の中のすべてのものは生成・流転・消滅する (生命のはかなさも知る)

そのプロセスで環境世界も生命個体も形態を維持する (永遠に続かないからこそ、生命を大切に)

ex. 河川の形態、昆虫の翅脈、植物の葉脈、身体の毛細血管の網の目状はすべて同じ形態

【河川・昆虫・植物・血管のスライド】

-----外の世界（環境）を知ることは内の世界（生命）を理解すること（逆に、内の世界を知ることは外の世界を理解すること）

また外の世界（環境）を破壊することは、内の世界（生命）を破壊することである

③学校教育のカリキュラム：環境教育に関して事例集のマニュアルや教科書のカリキュラムだけでなく、応用の効くモデル・プログラムも必要 (『環境基本計画』推進調査：パートナーシップによる環境教育・環境学習の推進)

-----教師の資質

④環境倫理 environmental ethics

世代間倫理、配分の公正性、生態系の同一性、動植物・自然の権利：人間以外も含む生態系倫理

-----環境教育の中で「環境モラル」(動物等に接する態度、日常の挨拶・躾等) として具体化

4. おわりに—地球環境問題の現状と環境教育の展開—

①地球環境問題の現状と環境教育の推進

i) 中国・環境問題の現状：郷鎮企業、陽泉市の炭鉱

ii) タイ・カオヤイ公園：エコツアーや環境教育

iii) カナダ・エコフォレストリー：バンクーバーの里山保全活動

②7000 年の屋久杉が教えること：生命と環境の教育をめぐって

【三井純夫『7000 年の記憶』、南日本新聞社】

-----生命 40 億年の歴史と人間数千年の歴史を考えてみて、時間としては数千年、空間としては地球単位の軸で環境教育は行なわれる必要がある

③生命倫理と環境倫理の根源は同一である：生命と環境はそれぞれ時間・空間的に圧縮されて「入れ子状」。また環境倫理と生命倫理は、21 世紀の時代において生態系の同一性、個体の同一性、遺伝子の同一性を保つことが原則。

第9回 おきなわ環境交流集会
「環境教育におけるパートナーシップ」

平成15年2月11日

海浜美化の課題

* 清掃 * 広報 * 教育 * 指導者の育成 * 法令等による規制

以上に関して

* 行政 * 団体 * 企業 * 学校 * ボランティアが連携を図り各施策を同時に実践し継続する事に依り、海浜の美化と保全は可能です。

ボランティアとしての実践

・ 清掃 ・ 広報 ・ 教育 ・ 指導者の育成

1 教育への取り組み（海浜環境教室）

- 1) 学校からの依頼
- 2) PTAからの依頼
- 3) 団体及び企業からの依頼
- 4) 自主開催

2 方法

- 1) 清掃
- 2) - ① 講議
 - ② 講議、グループ討議、発表
- 3) 講議後清掃
- 4) - ① 清掃、ゴミ調査
 - ② 統計、資料作成、分析、考察
- 5) 定点調査・発表

3 資料及びCD-ROM制作（小学校、中学校、高等学校へ無料配付）

- 1) 種類 ① レクチャー用 ② 学習用
- 2) 内容 ① 世界に誇れる海
② 海浜の現状
③ 被害を受ける海洋生物
④ 美化と保全の為に
⑤ スライドショー（学習用）

No 1 美ら海を未来へ No 2 海からのメッセージ

特定非営利活動法人 NPO
沖縄 海と渚 保全会

<http://www.mareclub.com/chura/> E-mail hozenkai@poem.ocn.ne.jp

田 中 幸 雄

2003. 2. 11. (火)
豊見城市立とよみ小学校
広川ヨシ子

教育現場から

1 総合的な学習の時間の中での環境学習

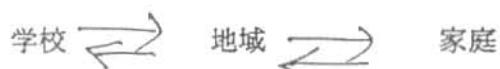
- ・地域素材の教材化
- ・児童の実態
- ・頭の中では分かって知識としてもっているが、行動につながらない。
(手・足を動かさない)

2 学校の枠をこえた環境活動

- ・地球規模で物事を考えている人は多いが、他の人とかかわって活動する人が少ない。
- ・都市化の中の自然
- ・感動を分かち合ってくれる大人が少ない。

3 学校と地域の課題

4 広い視点に立っての環境教育



環境学習のテーマはごく普通の生活の中にある。

メモ

1 本校の環境教育

本校では、児童が自分の生活している環境に目を向け、地域のよさを見つける環境学習が行われている。

児童一人一人が直接、自然や社会にふれ合い、人と出会い、感動したり疑問を持ったりして、主体的に学ぶことが環境教育のめざす「環境の痛みを自分の痛みとして感じ、その痛みを和らげるには、自分は何をしなければならないか」である。

幸いにも校区に日本でラムサール条約に登録された干潟「漫湖」がある。

その漫湖を中心に、TTによる学習や保護者、地域の教育ボランティア、ゲストティーチャーに協力を求め、野外観察、体験学習が展開されている。

そのことを通して、今日的課題の生きる力が培われるのではないかと思われる。

2 環境教育で育てたい主な能力・態度

- ①自然の事象・現象をとらえ、事実を尊重し、公正に判断する主体的な思考
- ②身近な地域、自然、地球環境について、自ら問題を見つけたり、創造したり、考察できる力としての問題発見能力、問題解決能力
- ③自然環境の変化について継続的、数量的に調べ、その調査結果を多くの学校や外国の子どもたちに発信するとともに、双方向で情報を交換し、環境の変化をグローバルな視点で考察する能力
- ④自然保护や環境保全、資源の有効利用について積極的にかかわる行動力を身に付ける社会的な態度
- ⑤体験的な学習を通して、身近な環境に見られる自然現象や社会現象についての興味や関心の高揚

3 観察力の基礎・基本

基礎・基本として次のようなものに気づかせながら学習活動を続けたい。

- ものようす ○人のようす ○人の気持ち ○人やものの数
 - 左・右・上・下 ○多い・少ない ○色・におい・音
 - 同じ ○違い ○ひろがりなど
- 五感を使って気づかせる。
- 観察の目的や課題を決める。 ○予想を立てる ○観察の計画、方法、記録
 - 観察した結果の自己評価

4 観察のねらいにふさわしい環境設定

- ①観察するエリア…全体の様子をとらえる。
- ②観察する回数……何回観察する必要があるか予想を立てておく。
- ③観察する時間帯…時間帯の特徴をとらえておく。潮の干満
- ④観察する季節…観察する季節の適宜性。
- ⑤観察する（人）…適切な支援として決める。
(物)
(事)

年度	開催年月日	内容	氏名・所属
6	H6.9.14	基調講演「環境共生型まちづくりと環境管理」	琉大教授 池田孝之
		基調報告「比謝川とYOU・遊・比謝川」	YOU・遊・比謝川実行委員会事務局長 神山吉郎
	"	「滅びゆく沖縄の植物たち」	琉大助教授 橋田昌嗣
	"	「ごみ減量・リサイクル型社会へのシステム作り」	那覇市環境業務課長 湧田廣
7	H8.2.16	基調講演 環境自治体の創造～地域からの政治改革 私論～	鎌倉市長 竹内 謙
		コーディネーター	沖縄タイムス社論説主幹 由井晶子
		基調報告	沖縄サイクリング市民の会代表 古我知浩
			ヤシナルの山を守る連絡会 浦島悦子
			比謝川を蘇生させる会 神村盛貞
			沖縄県環境保全課長 松川初男
		基調講演 環境基本法と環境基本条例の役割～環境政策のあらたな展開	福岡大学教授 浅野直人
8	H8.11.18 ~		
		コーディネーター	琉球大学教授 池田孝之
		基調報告 <循環>	琉球大学教授 宇井純
		<共生>	琉球大学教授 土屋誠
		<参加>	(株)都市科学政策研究所 備瀬ヒロ子
		<国際的取組>	琉球大学名誉教授 木崎甲子郎
		<環境行政>	沖縄県環境保全室長 金城嘉榮
9	H10.1.28	セッション「豊かな自然と共生する街づくり」	具志川市水と緑を考える会 島袋守安
		セッション「亜熱帯の青い海の再生」	沖縄O.C.E.A.N E・H・サンチエス
		セッション「住民参加型の環境保全活動について」	沖縄県婦人連合会 松田敬子
			沖縄環境ネットワーク 砂川かおり
10	H11.3.12	基調講演「地球温暖化による影響と対策について」	環境省地域環境部環境保全対策課課長補佐 木村敦彦
		事例報告「沖縄電力(株)の地球温暖化問題への取り組み」	沖縄電力(株)立地環境部環境技術課長 與儀勉
	"	「沖縄石油製油(株)における省エネ活動」	沖縄石油精製(株)沖縄製油所管理課長 高橋正寿
	"	「森林を守ることは地球温暖化防止に本当に役立つのでしょうか」	琉球大学農学部助教授 馬場繁幸
	"	「『地球市民の日(8月8日)』推進運動と取組」	(社)日本青年會議所沖縄プロジェクト協議会副会長 仲田康彦
	"	「消費者の動機付け：いかに具体的な行動に結びつけるか」	琉球大学法文学部講師 平野英一

環境交流集会 これまでのテーマ等

No.2

年度	開催年月日	内容	氏名・所属
11	H12.2.10	基調講演「豊中市におけるローカルアジェンダ21 パネルディスカッション「ローカルアジェンダと市民参加」	大阪府豊中市環境企画課課長補佐 川崎健次 (株)ビジネスランド代表取締役 渕辺美紀
	"		琉球大学法文学部教授 伊波美智子
	"		沖縄県女性団体連絡協議会事務局長 渡久地澄子
	"		沖縄リサイクル運動市民の会代表 古我知浩
	"		沖縄環境ネットワーク会員 仲西美佐子
12	H12.12.23	基調講演「世界で最もローカルアジェンダ21が進んだ国スウェーデン」 …その成功の鍵は何だったのか…	ナチュラル・ステップ・ジャパン理事長 高見幸子
			琉球大学工学部教授 永井 實
			琉球大学法文学部教授 伊波美智子
			沖縄電力立地環境部次長 宮城
			沖縄リサイクル運動市民の会代表 古我知浩
			県文化環境部環境保全室環境管理監 石垣英治
			埼玉大学教育学部助教授 阿部 治
			グループエコライフ主宰 西江重信
13	H14.2.15	基調講演「持続可能な社会を目指す環境教育」 …県民・事業者・行政が一体となって行動するためには！…	琉球大学教育学部2年次・沖縄自然教育力フェ代表 丸谷 由
			琉球大学国際大学商経学部4年次 神里 陸
			沖縄大学法経学部4年次 上原辰五
			沖縄県教育庁県立学校教育課課長補佐 與先安喜
			沖縄県文化環境部環境政策課主幹 金城康政